

起業の裾野拡大に向けた調査研究

2019年7月

独立行政法人中小企業基盤整備機構

企画部 調査課

はじめに

我が国の開業率が他の先進国と比較して低い要因として、起業を希望する人の少なさが指摘されており、起業家の数を増やすためには、起業希望者そのものの数を増やすことまで視野に入れた、幅広い施策の検討が必要となっている。そこで、現在活躍中の起業家が起業に至るまでのプロセスや起業希望者そのものの数を増やすために必要な機会や取組み等を分析することによって、起業の裾野拡大のために必要かつ有効な要素等を探り、創業支援策の立案や創業支援事業の運営に資することを目的とする。

本調査は、2018年度に独立行政法人中小企業基盤整備機構がみずほ情報総研株式会社（担当：安田修氏、稲場未南氏、鈴木道範氏）に委託して実施した。また、各調査の実施、報告書の取りまとめにあたっては検討委員会を開催した。

なお、本レポートは、本調査で実施した調査結果に基づき、みずほ情報総研株式会社が作成した報告書を基に、独立行政法人中小企業基盤整備機構が監修したものである。

<検討委員会>

委員長 高橋 徳行 武蔵大学 副学長 経営学部 教授

委員 杉浦 元 NPO法人ETIC.

高橋 一朗 西武信用金庫 常務理事

（敬称略・五十音順・所属・役職は検討委員会開催当時）

本調査の実施にあたり、グループインタビュー・インタビュー調査にご協力いただいた、一般社団法人日本女性起業家支援協会・近藤洋子代表理事、株式会社アンテレクト・藤井孝一取締役会長、西栗倉村役場・上山隆浩地方創生特任参事、起業家の皆様に改めてお礼を申し上げたい。

目次

起業の裾野拡大に向けた調査研究

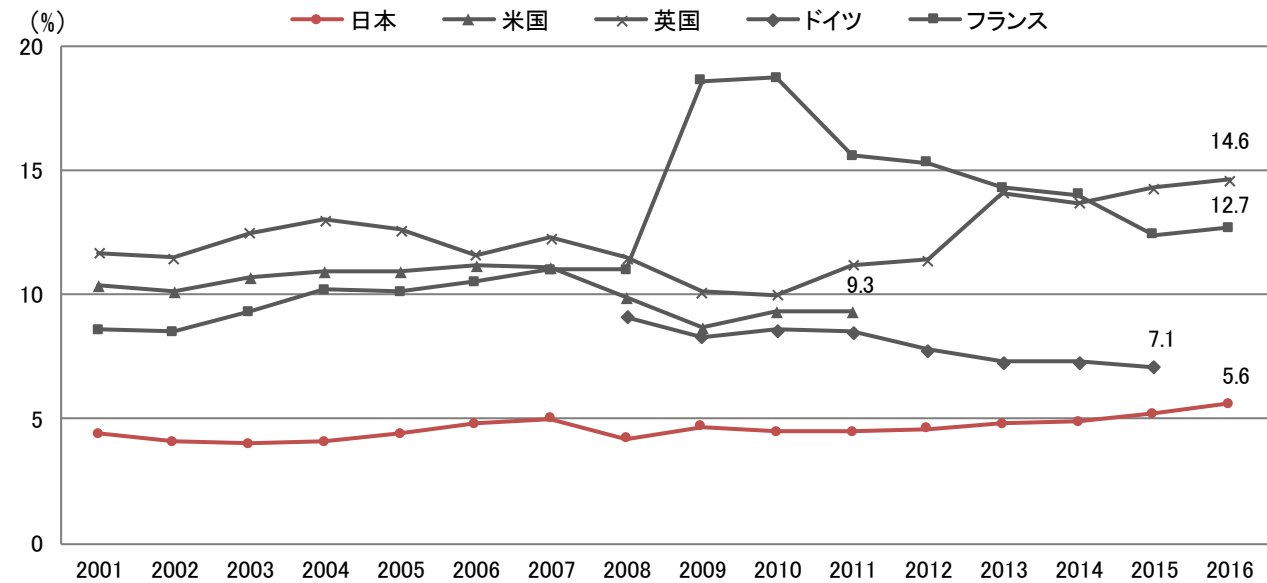
1. 本調査の背景	1
2. 調査の視点	3
3. アンケート調査	4
(1) アンケート調査概要	4
(2) 起業・独立・開業を選択肢の一つとして考えたことがあるか等の調査結果	5
(3) 起業・独立・開業が選択肢の一つになったきっかけ等の調査結果	8
(4) 「起業したことがある人」と「考えたが起業していない人」に関する調査結果	16
4. グループインタビュー・インタビュー調査	20
(1) グループインタビュー・インタビュー調査概要	20
(2) グループインタビュー・インタビュー調査結果（カテゴリー内の共通点の抽出）	21
(3) グループインタビュー・インタビュー調査結果（カテゴリー毎の共通点の抽出及び相違点の把握）	26
5. 起業の裾野拡大のために必要な機会や取組み	30
(1) 起業が選択肢の一つとして認識してもらうために必要な機会や取組み（アンケート調査結果）	30
(2) 起業が選択肢の一つとして認識してもらうために必要な機会や取組み（グループインタビュー・インタビュー調査結果）	34
(3) 起業の裾野を拡大するためには	38

1. 本調査の背景

我が国における経済の持続的な成長、新規雇用の創出のためには、起業により経済の新陳代謝を促進していくことが重要であると考えられている。また、近年は、既存の環境では実現が難しかったような働き方や生き方を実現するための選択肢としても起業が注目され、社会をより多様で豊かにするという観点からも、起業の意義が高まっている。

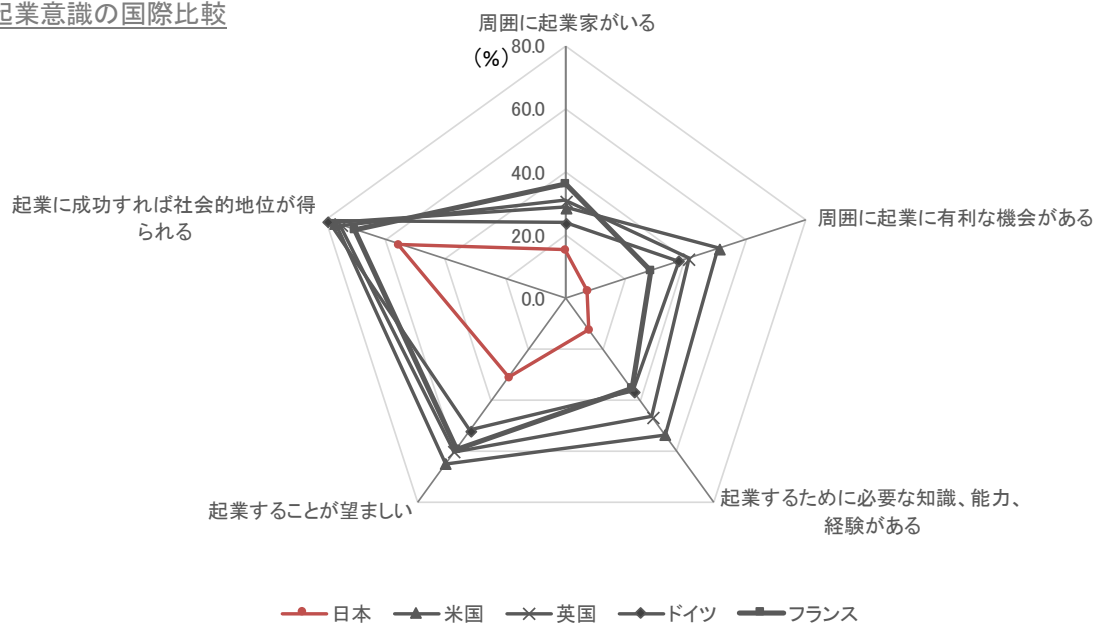
そのような背景もあり、中央省庁、地方自治体、NPO、民間企業等によって様々な起業支援策が行われている。しかしながら、わが国の開業率は諸外国と比較して低い水準にあり【図1】、起業意識も低いことが示されている【図2】。

図1 開業率の国際比較



出所: 中小企業白書 2018 年度版(中小企業庁)

図2 起業意識の国際比較



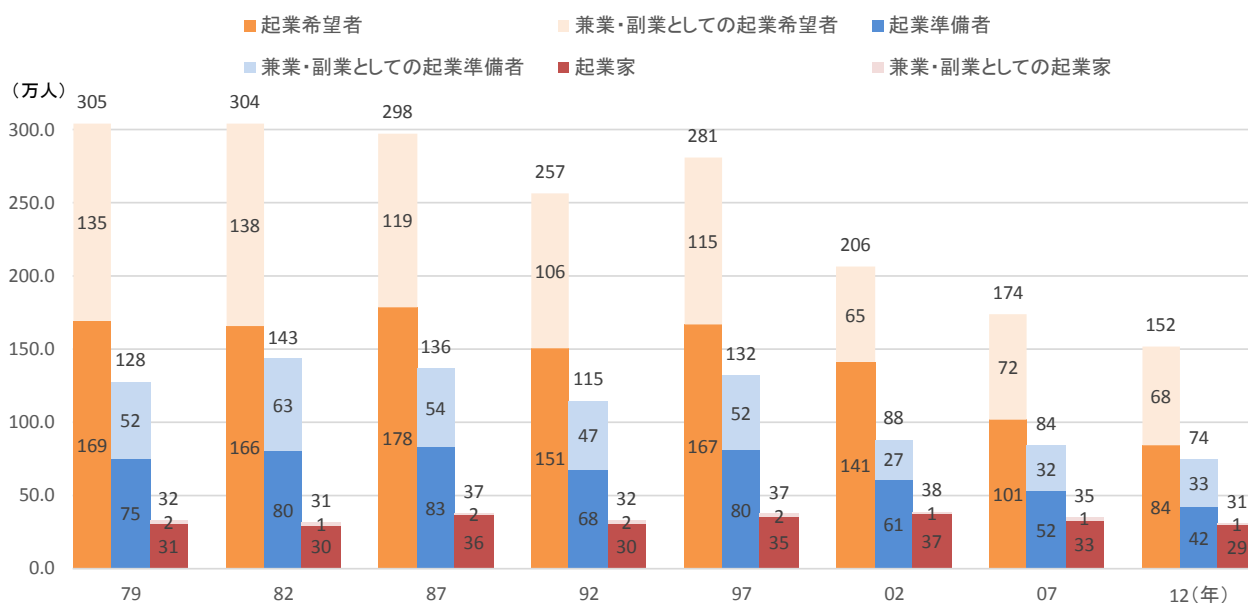
出所: 中小企業白書 2017 年度版(中小企業庁)

また、過去にさかのぼってみると、1970年代、1980年代、1990年代と3度のベンチャーブームがあり、起業に対する世の中の関心が高まったが、いずれも一過性の機運に過ぎず根本的に国内における起業機運が高まるような流れにはならなかった。

さらに、起業の担い手【図3】である、起業希望者、起業準備者、起業家の数は、1997年以降、年々減少傾向にあり、特に、起業希望者の数は1997年時点で167万人存在していたが2012年には、84万人となり、約半数にまで落ち込んでいる。

一方で、起業家の数は、1997年時点で35万人、2012年時点で29万人と起業希望者や、起業準備者と比べると減少割合は緩やかであり、一定数の起業家が誕生している。

図3 起業の担い手



出所: 中小企業白書 2017 年度版(中小企業庁)を加工

この状況について、各種起業支援施策による効果や、景気変動といった外部環境要因が影響していると考えられるが、他にも起業家自身の「起業が選択肢と認識された機会(きっかけ)」や「根底にある動機」が関係していることが各種事例調査によって明らかにされている。

例: きっかけと動機

食堂店主 A氏

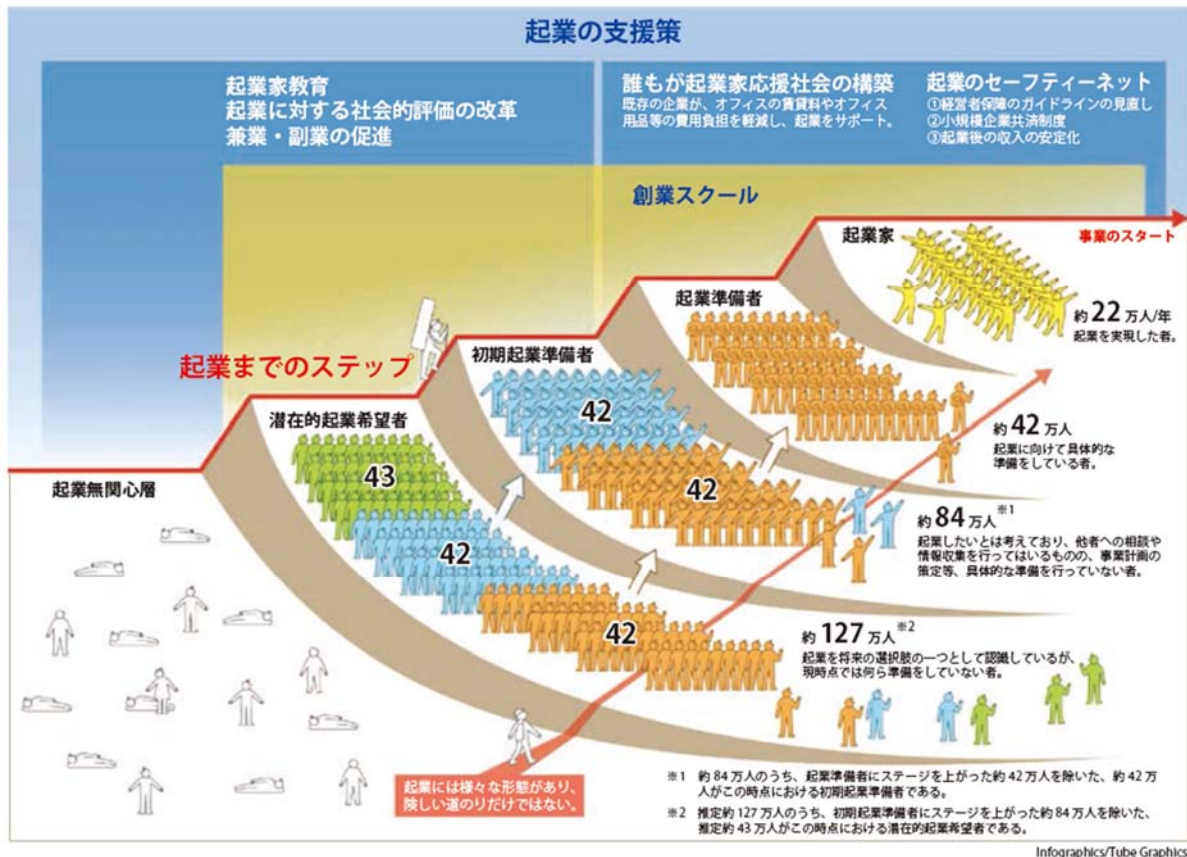
きっかけ: 起業する以前、A氏は飲食店に勤務していた。しかし、妻が体調を崩してしまい、家庭を優先する必要性が生じたため退職した。就職先を探していたが、希望する給料や雇用条件に合う会社が見つからなかった。悩んだ末、家庭と仕事を両立する手段として起業を選択肢として認識するようになった。

動機: A氏は飲食店に勤務していた当時、帰宅時間が遅くなることが多く、幼い子供の育児を妻に任せたまの状態で続いていた。そのため、A氏は今の仕事中心の生活を見直し、家族と過ごす時間を充実させたいと考えていた。

2. 調査の視点

本調査は、起業の裾野拡大のために必要かつ有効な要素を探ることを目的の一つとしているが、起業家が起業に至るステップは複数あり、中小企業白書 2014 年度版（中小企業庁）によると、4つのステージに区分される【図4】。

図4 起業のステージと支援策



出所：中小企業白書 2014 年度版（中小企業庁）

潜在的起業希望者：起業を将来の選択肢の一つとして認識しているが、現時点では何ら準備をしていない者

初期起業準備者：起業したいと考えており、他者への相談や情報収集を行っているものの、事業計画の策定等、具体的な準備を行っていない者

起業準備者：起業に向けて具体的な準備をしている者

起業家：起業を実現した者

起業家を増やすためには、各ステージの母数を増やすための機会や取組みが必要である。一方で、我が国は、諸外国と比べて起業意識が低いと示されていることや、起業準備者に比べて起業希望者の減少が著しい【図3】ことから、起業希望者の数を増やすために、まず、起業を選択肢として認識してもらう必要があると考えた。そこで、本調査では、起業家自身の「起業が選択肢と認識された機会（きっかけ）」について明らかにし、起業に至る要素として起業家自身の「根底にある動機」について実態を把握するため、アンケート調査及びインタビュー調査を行った。

3. アンケート調査

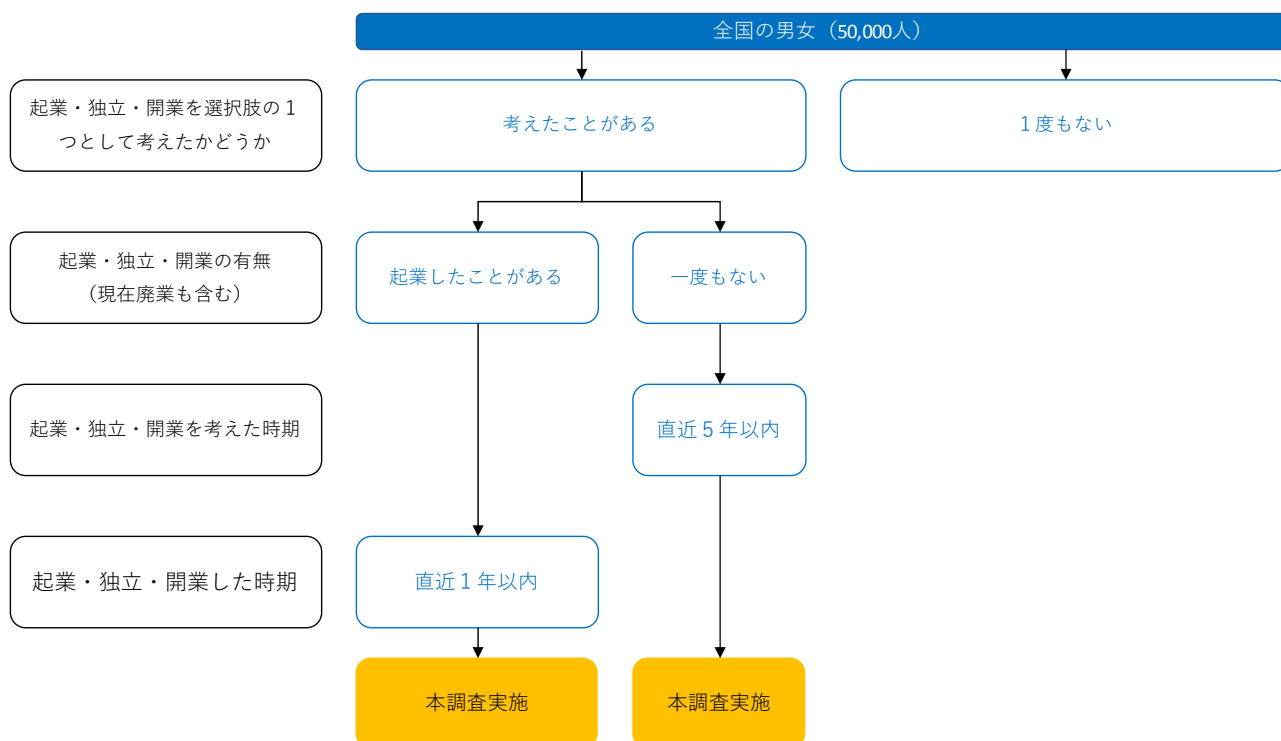
(1) アンケート調査概要

調査は、2018年11月14日から24日にかけて、民間調査会社のモニター会員に対してオンラインアンケート方式にて実施。始めに、全国の男女50,000人を抽出し、二回に分けて調査を行った。なお、二回目のアンケート調査にて、「起業を選択肢の一つとして考えたことがある人」の中から、「起業した人」、「起業していない人」の双方の実態を把握するために、一回目の調査で図5の質問を行い、対象先の抽出を行った。

一回目：起業・独立・開業を選択肢の一つとして考えたことがあるか等の調査

二回目：起業・独立・開業が選択肢の一つになったきっかけ等の調査

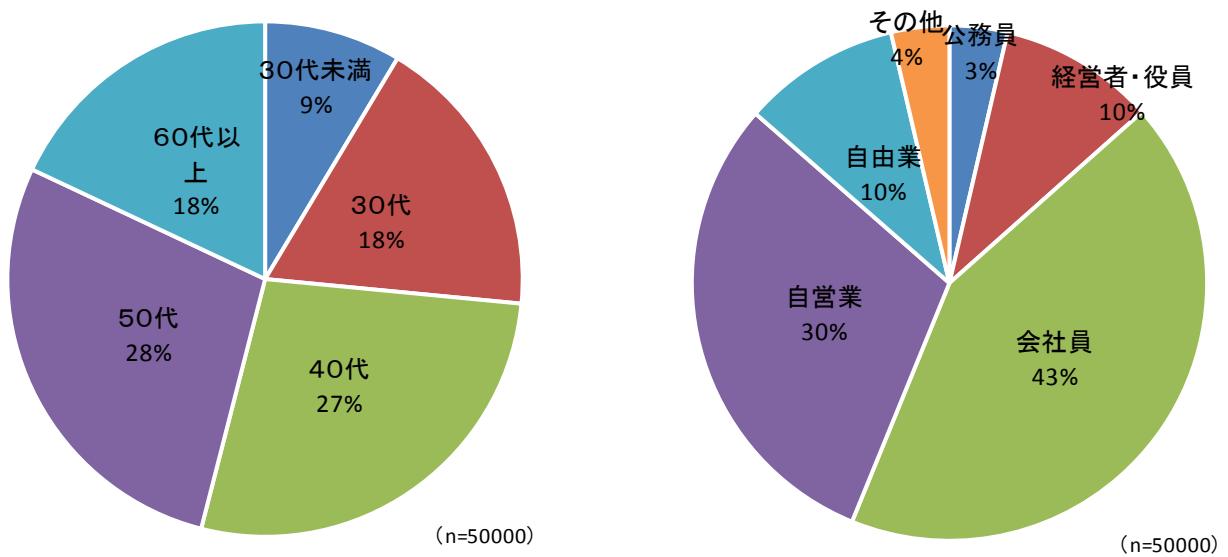
図5 アンケート実施概要図



(2) 起業・独立・開業を選択肢の一つとして考えたことがあるか等の調査結果

①回答者の属性

図6 回答者の属性

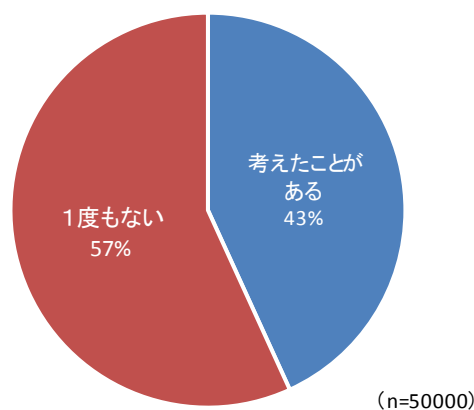


(注) 小数点以下の端数が生じる場合、見やすさを考慮し、小数点以下第1位を四捨五入している。端数を処理した結果、内訳計と合計が一致しないことがある。

回答者の年齢をみると、30代未満が9%、30代が18%、40代が27%、50代が28%、60代以上が18%となった。回答者の職業をみると、会社員が43%と最も多く、次いで、自営業が30%となった。

②起業・独立・開業を選択肢の一つとして考えた人の割合

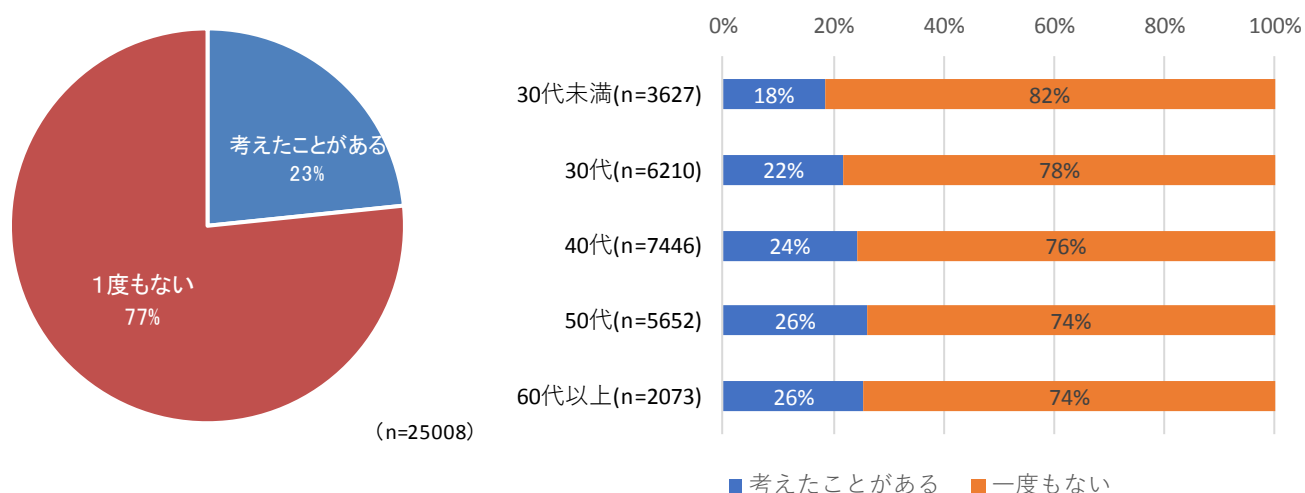
図7 起業・独立・開業を選択肢の1つとして考えたことがあるか



調査では、「起業・独立・開業を選択肢の1つとして考えたことがあるか」質問を行った。その結果、回答者うち43%が「選択肢の1つとして考えたことがある」と回答し、一方で57%が「1度もない」と回答している。

③起業・独立・開業を選択肢の一つとして考えた人の割合（職業「公務員」、「会社員」、「その他」）

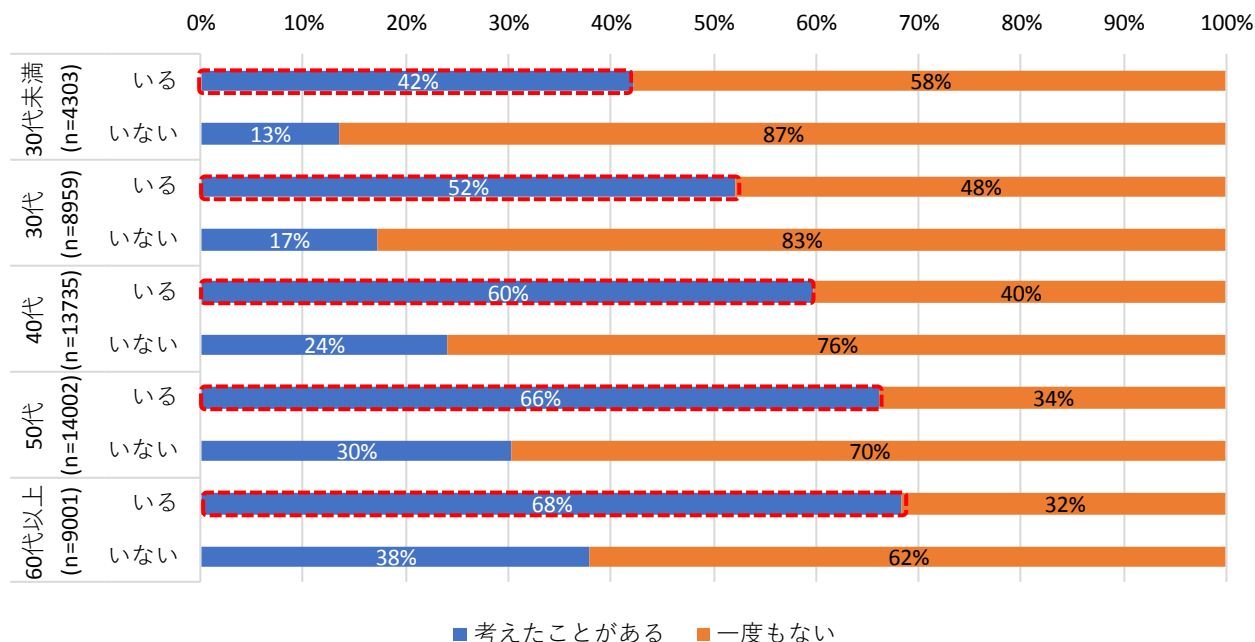
図8 起業・独立・開業を選択肢の一つとして考えたことがあるか



また、50,000人のうち、「公務員」、「会社員」、「その他」の25,008名を対象にした場合、「選択肢の一つとして考えたことがある」と回答した人の割合は、23%となった。また、世代別にみると、30代未満の割合が18%と最も低い結果となった。

④親族・友人に起業・独立・開業をした人がいることによる起業意識の変化

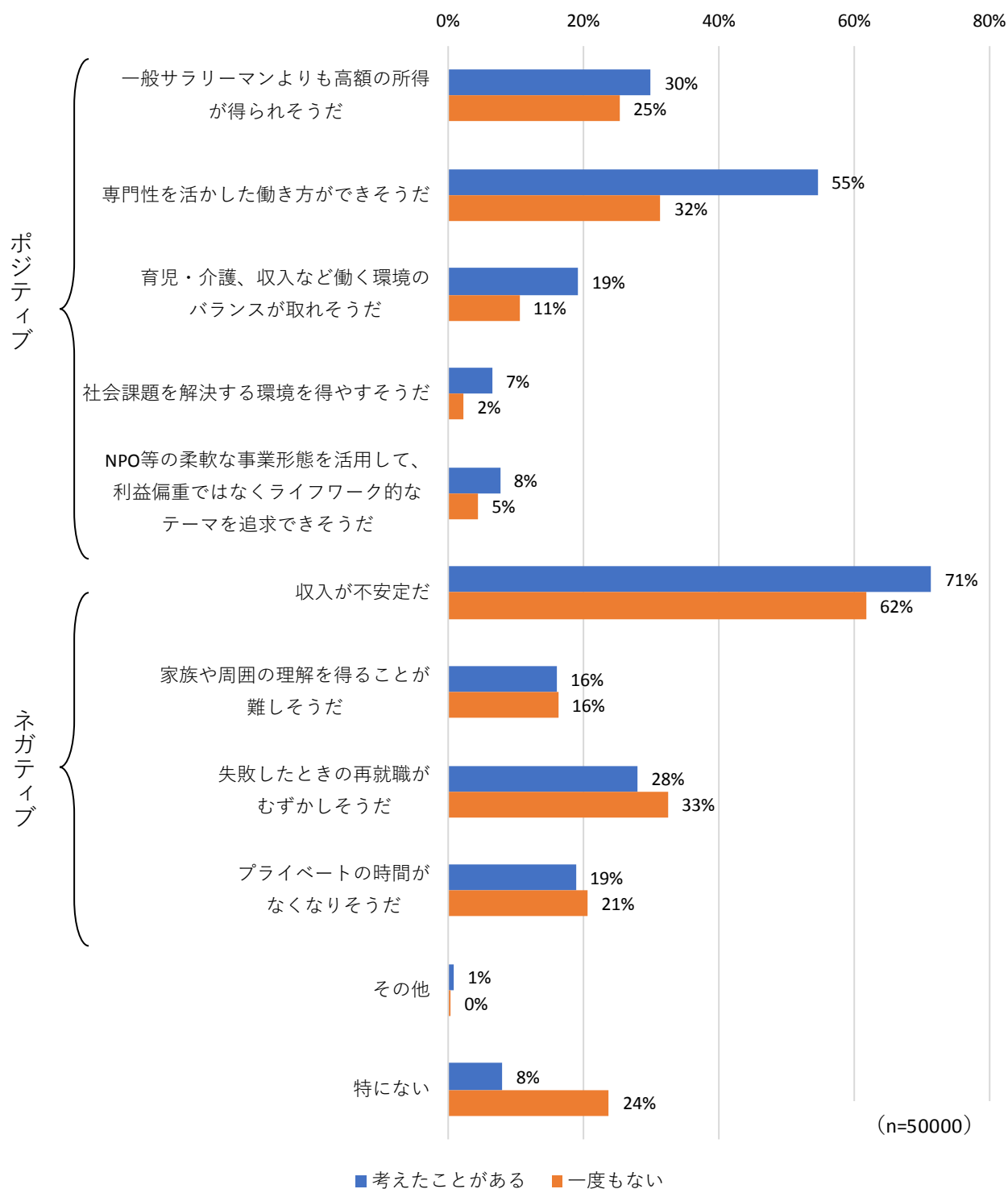
図9 親族・友人に起業・独立・開業をした人が存在するか



「親族・友人に起業・独立・開業をした人がいる」と回答した人は、どの世代においても起業・独立・開業を選択肢の一つとして考えたことがある割合が高い傾向となっている。

⑤起業・独立・開業に対する印象

図 10 起業・独立・開業の印象(複数回答)



起業・独立・開業に対する印象を全体で見ると、「収入が不安」と回答した割合が最も高い。さらに、「考えたことがある」、「一度もない」を比較してみると、「考えたことがある」と回答した人は、「一度もない」と回答した人よりもポジティブな印象を持つ結果となった。特に、「専門性を活かした働き方ができそう」と回答した割合では、大きく上回った。

(3) 起業・独立・開業が選択肢の一つになったきっかけ等の調査結果

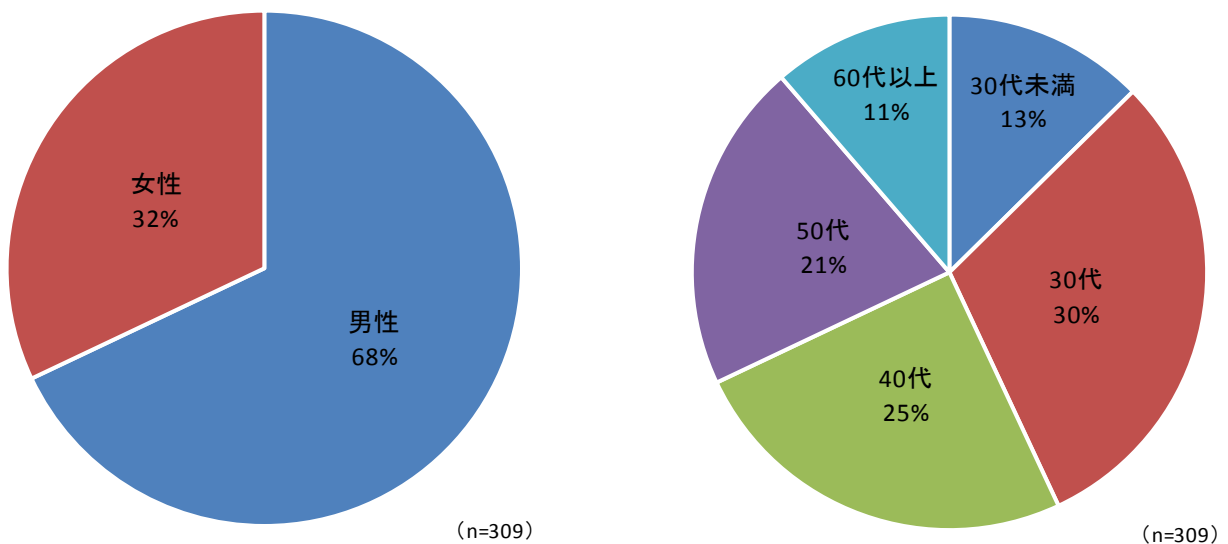
調査は一回目の調査によって明らかとなった「起業・独立・開業したことがある人（以下、起業したことがある人）」、「起業・独立・開業を考えたが起業していない人（以下、考えたが起業していない人）」の母集団からそれぞれ 309 人を抽出して二回目のアンケート調査を行った。

なお、起業・独立・開業した人は、当時の状況を正確に把握するため、過去 1 年以内に起業・独立・開業した人を対象にした。

また、起業・独立・開業を考えたが起業していない人は、当時の状況を正確に把握することに加えて、起業を選択肢として考えてからどのような行動をしたのかを把握するため、一定期間経過した過去 5 年以内に起業・独立・開業を考えた人を対象にした。

① 起業・独立・開業したことがある人の回答者の属性

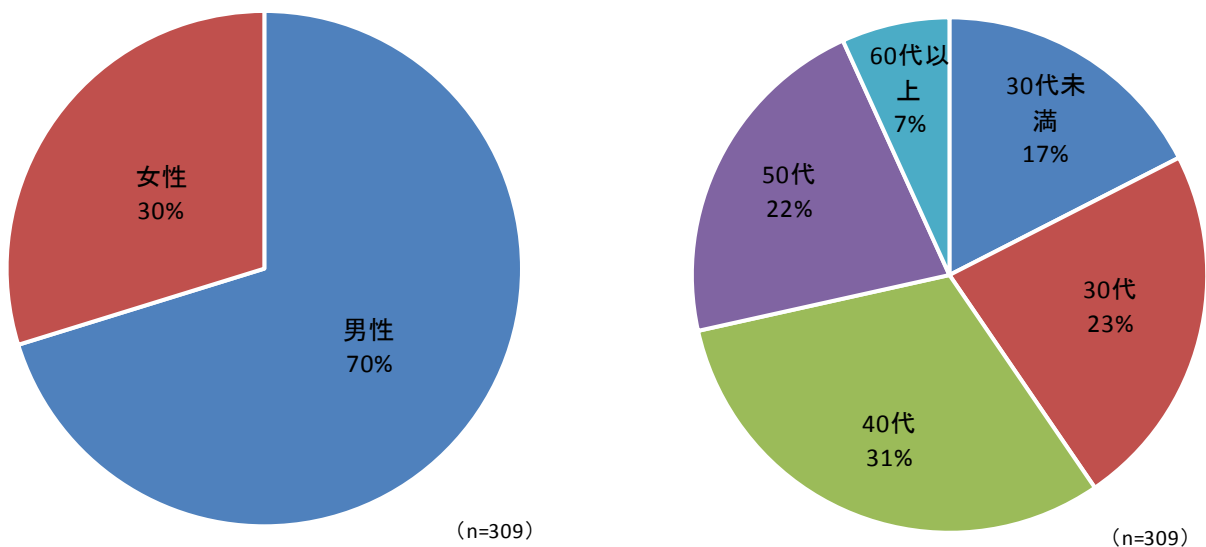
図 11 回答者の属性



(注) 回答者には、既に廃業した人を含む。

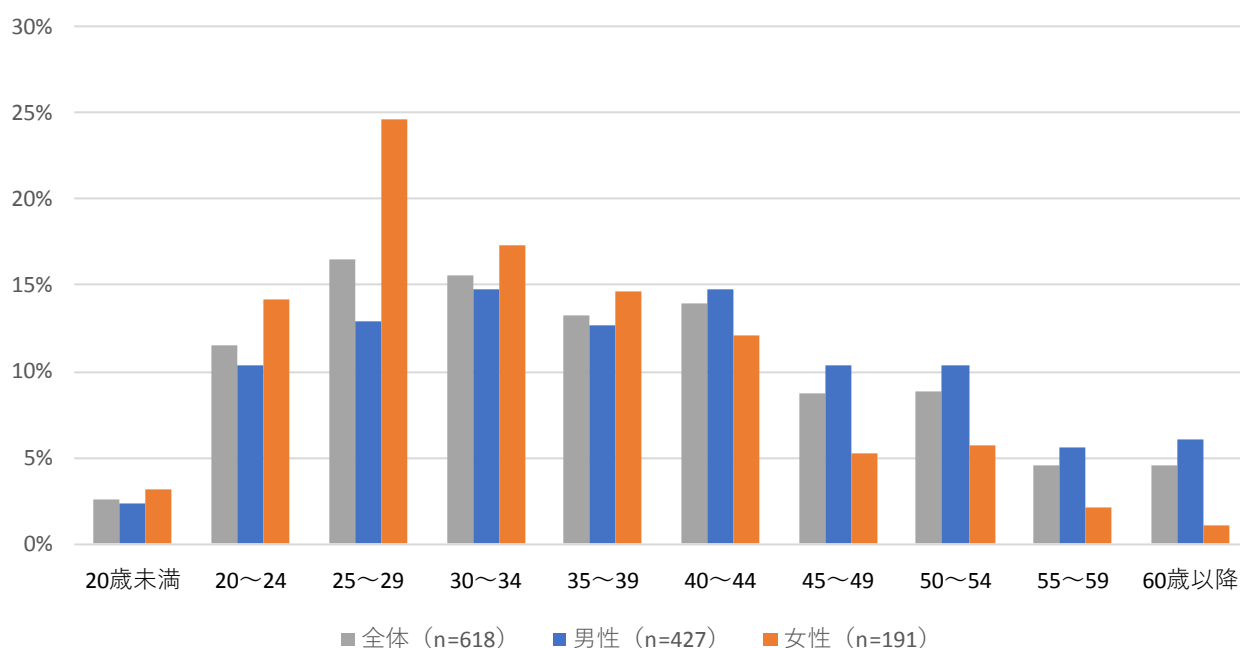
② 起業・独立・開業を考えたが起業していない人の回答者の属性

図 12 回答者の属性



③起業・独立・開業を選択肢の一つとして最も強く考えた時の年齢

図 13 何歳のときに起業・独立・開業が選択肢の一つになりましたか



「起業・独立・開業を選択肢の1つとして最も強く考えた時の年齢」について質問を行った結果、全体として、20代後半の割合が高く、次いで30代前半と続く。また、男女別にみると、男性は、30~34歳及び40~44歳の割合が高く、女性は25~29歳が最も高い。

④起業・独立・開業を選択肢の一つとして最も強く考えた時の状況

表 1 起業・独立・開業が選択肢になったときの状況

	起業したことがある人 (n=309)	考えたが起業していない人 (n=309)
大企業に勤務	19%	19%
中小企業に勤務	45%	44%
ベンチャー企業に勤務	7%	3%
NPO法人に勤務	1%	1%
公的機関に勤務	4%	9%
長期の育児休暇や介護休暇中	2%	3%
学生（定職なし）	5%	5%
主婦・主夫（定職なし）	4%	2%
転職活動中（定職なし）	8%	10%
その他	5%	5%

起業・独立・開業を選択肢の一つとして最も強く考えた時の状況を見ると、「起業したことがある人」、「考えたが起業していない人」のどちらも「中小企業に勤務」と答えた人の割合が最も高く、次いで、「大企業に勤務」と回答した割合が高い。

⑤起業・独立・開業が選択肢の一つになった最も大きなきっかけ

図 14 起業・独立・開業が選択肢の一つになった最も大きなきっかけは何か(男女別)

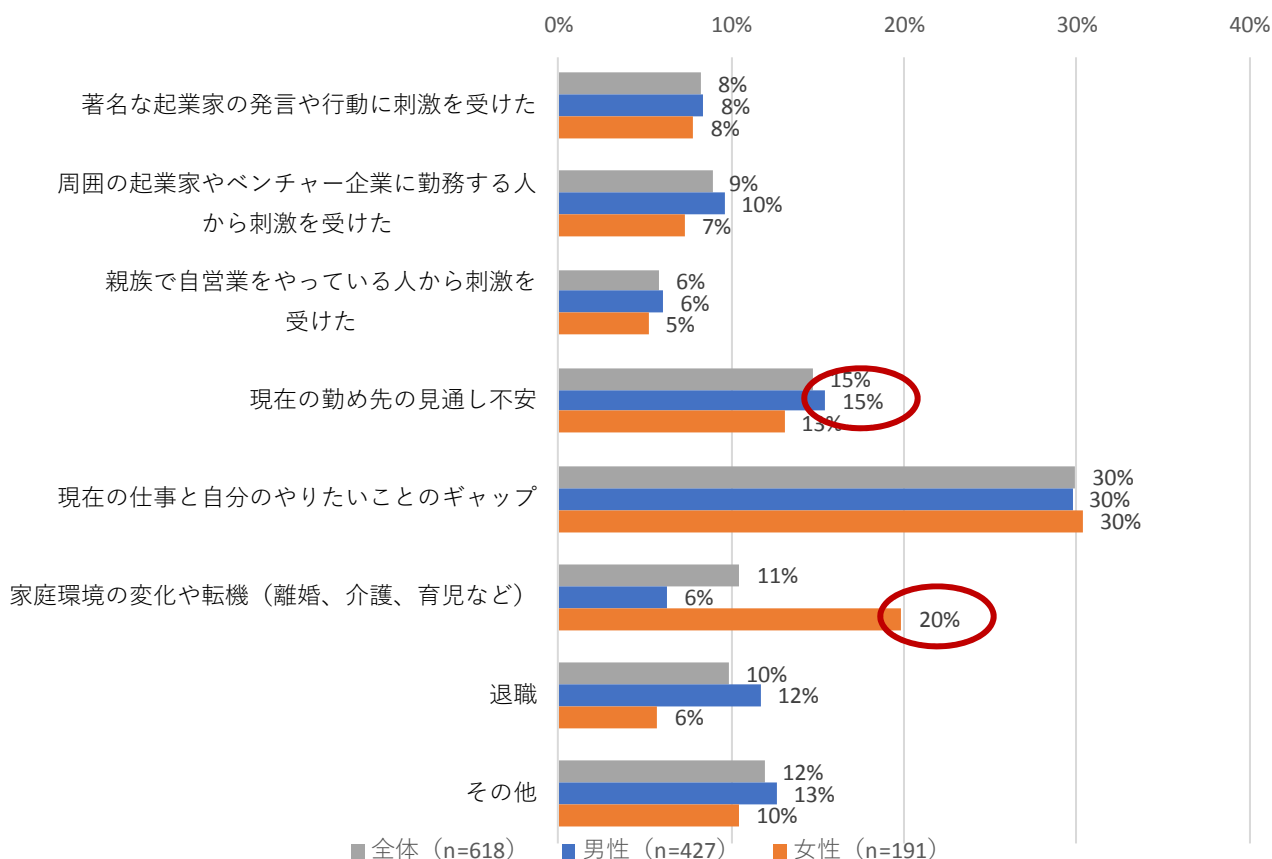


表 2 起業・独立・開業が選択肢の一つになった最も大きなきっかけは何か(最も強く考えた当時の年齢別)

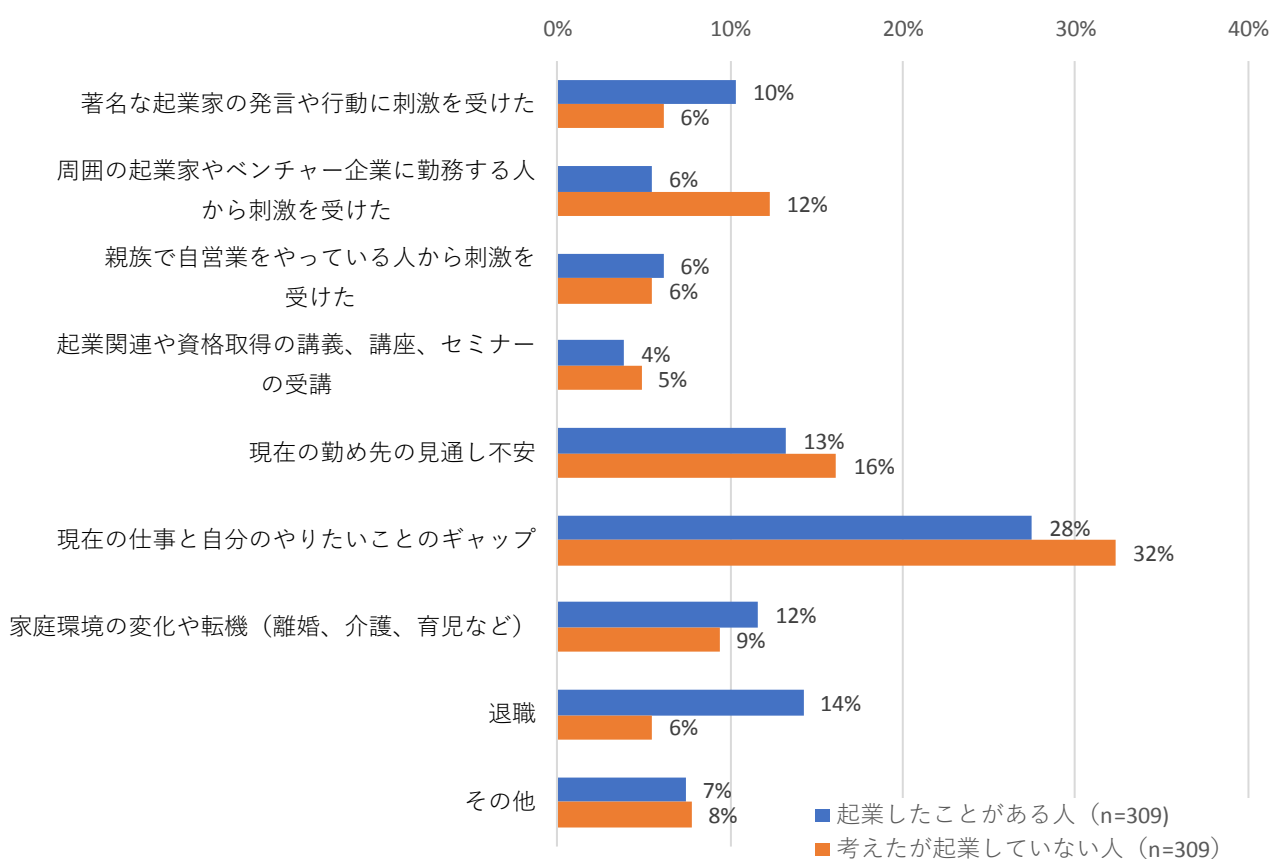
きっかけ	刺激を受けた家の発言や行動に	著名な起業家の発言や行動に	勤務する人から刺激を受けた	周囲の起業家やベンチャー企業に	親族で自営業をやっている人	現在の勤め先の見通し不安	現在の仕事と自分のやりたいこと	（離婚、介護、育児など） 家庭環境の変化や転機	退職	その他
年齢										
30代未満 (n=189)	14%	12%	8%	9%	31%	8%	4%	15%		
30代 (n=178)	6%	7%	7%	15%	30%	15%	8%	12%		
40代 (n=140)	7%	10%	5%	22%	26%	12%	11%	7%		
50代 (n=83)	4%	6%	1%	18%	33%	7%	17%	14%		
60代以上 (n=28)	4%	7%	4%	4%	32%	0%	39%	11%		

起業・独立・開業が選択肢の一つになった最も大きなきっかけは、全体として、「現在の仕事と自分のやりたいことのギャップ」と回答した割合が最も高い結果となった。また、男女別にみると、「現在の仕事と自分のやりたいことのギャップ」に次いで、男性は「現在の勤め先の見通し不安」の割合が高く、一方女性は、「家庭環境の変化や転機」の割合が高い点で違いがみられる。

選択肢の一つとして最も強く考えた当時の年齢別にみると、30代未満から50代は、「現在の仕事と自分のやりたいことのギャップ」の割合が高く、60代は、「退職」の割合が高い。

また、項目別にみると、「著名な起業家の発言や行動に刺激を受けた」と回答した割合は、他の世代と比べて30代未満が最も高い。また、「家庭環境の変化や転機」の割合は、30代が高く、「現在の勤め先の見通し不安」は、40代が高い。

図 15 起業・独立・開業が選択肢の一つになった最も大きなきっかけは何か(起業した、していない別)



「起業したことがある人」、「考えたが起業していない人」を比較すると、どちらも「現在の仕事と自分のやりたいことのギャップ」と回答した割合が最も高い。また、個別にみると「起業したことがある人」は、「現在の仕事と自分のやりたいことのギャップ」に次いで、「退職」、「現在の勤め先の見通し不安」と続く。一方で、「考えたが起業していない人」は、「現在の仕事と自分のやりたいことのギャップ」に次いで、「現在の勤め先の見通し不安」、「周囲の起業家やベンチャー企業に勤務する人から刺激を受けた」と続く。

⑥起業・独立・開業を選択肢の一つと認識してから感じた不安

図 16 起業・独立・開業を選択肢の一つとし認識してから感じた不安(男女別)

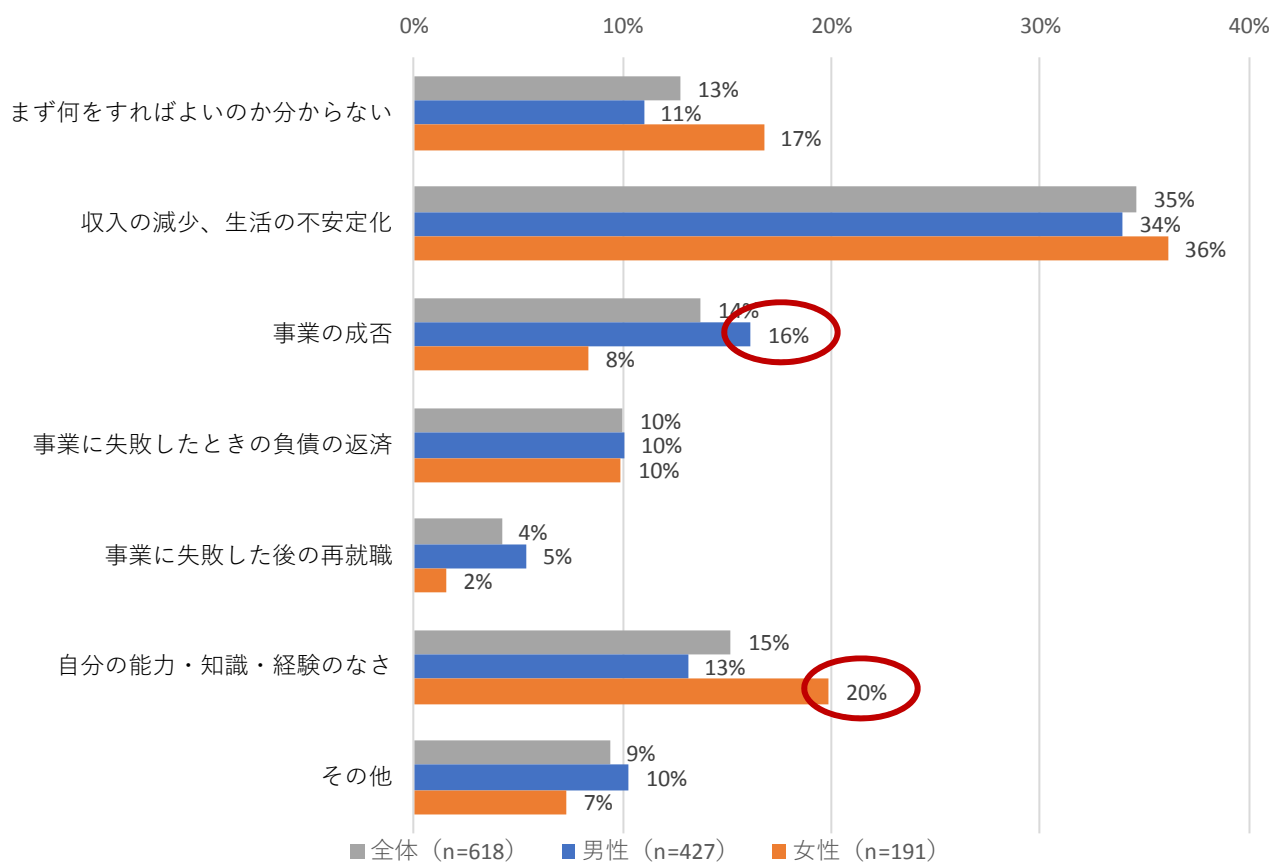


表 3 起業・独立・開業を選択肢の一つとし認識してから感じた不安(最も強く考えた当時の年齢別)

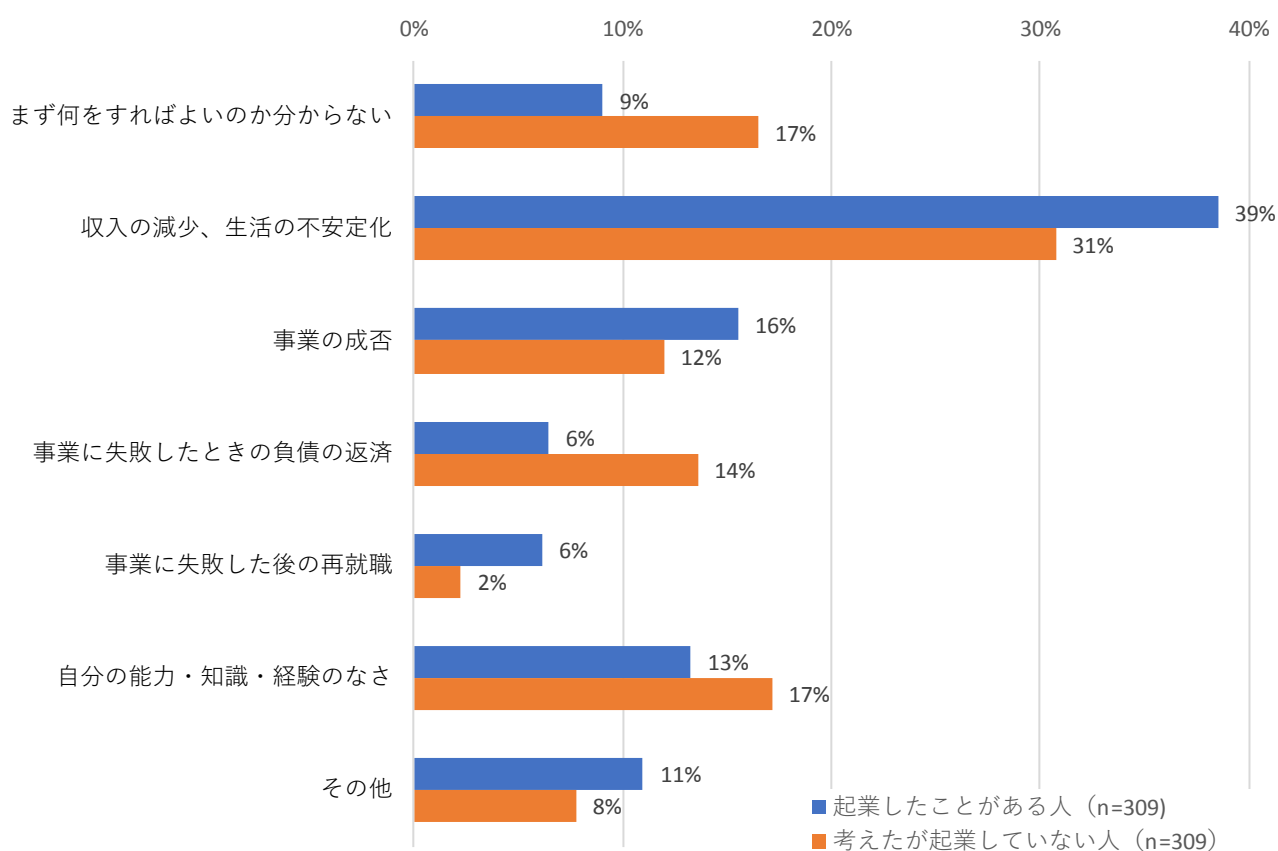
不安	まず何をすればよいのか	収入の減少、生活の不安定化	事業の成否	事業に失敗したときの負債の返済	事業に失敗した後の再就職	自分の能力・知識・経験のなさ	その他
年齢							
30代未満 (n=189)	17%	31%	12%	12%	4%	15%	9%
30代 (n=178)	10%	35%	13%	11%	4%	16%	10%
40代 (n=140)	14%	41%	11%	9%	4%	14%	6%
50代 (n=83)	4%	33%	18%	10%	5%	17%	14%
60代以上 (n=28)	18%	29%	29%	0%	4%	7%	14%

起業・独立・開業が選択肢の一つと認識してから感じた不安は、全体として、「収入の減少、生活の不安定化」と回答した割合が最も高い結果となった。また、男女別にみると、「収入の減少、生活の不安定化」に次いで、男性は「事業の成否」の割合が高く、一方女性は、「自分の能力・知識・経験のなさ」の割合が高い点で違いがみられる。

選択肢の一つとして最も強く考えた当時の年齢別にみると、全ての世代で「収入の減少、生活の不安定化」の割合が最も高い。

特筆すべき点としては、「事業の成否」と回答した割合は、他の世代と比べて 60 代が最も高い。

図 17 起業・独立・開業を選択肢の一つとし認識してから感じた不安(起業した、していない別)



「起業したことがある人」、「考えたが起業していない人」を比較すると、どちらも「収入の減少、生活の不安定化」と回答した割合が最も高い。また、個別にみると「起業したことがある人」は、「収入の減少、生活の不安定化」に次いで、「事業の成否」と続く。一方で、「考えたが起業していない人」は、「収入の減少、生活の不安定化」に次いで、「まず何をすればよいのか分からない」、「自分の能力・知識・経験のなさ」と続く。

⑦不安を解消するために、はじめに行った行動

図 18 不安を解消するために、はじめに行ったことは(男女別)

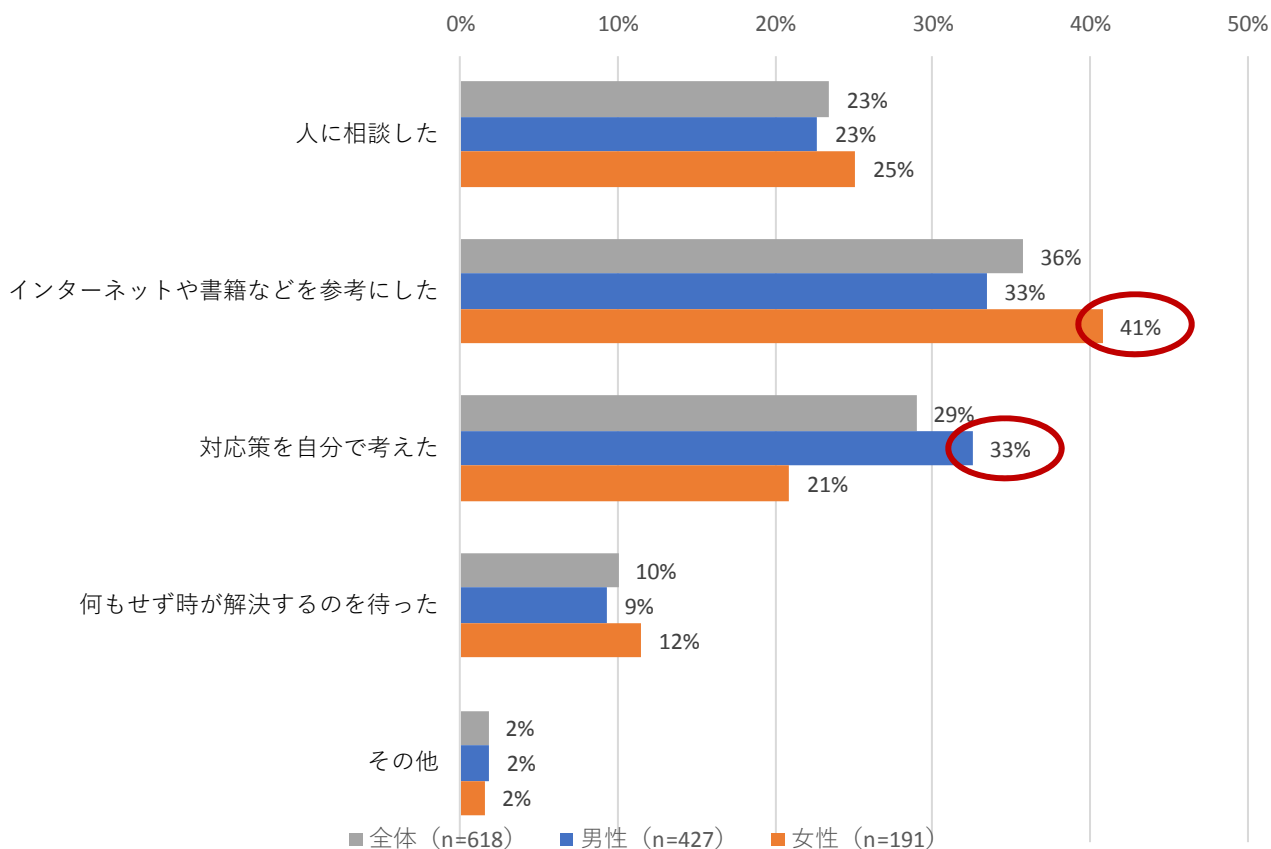


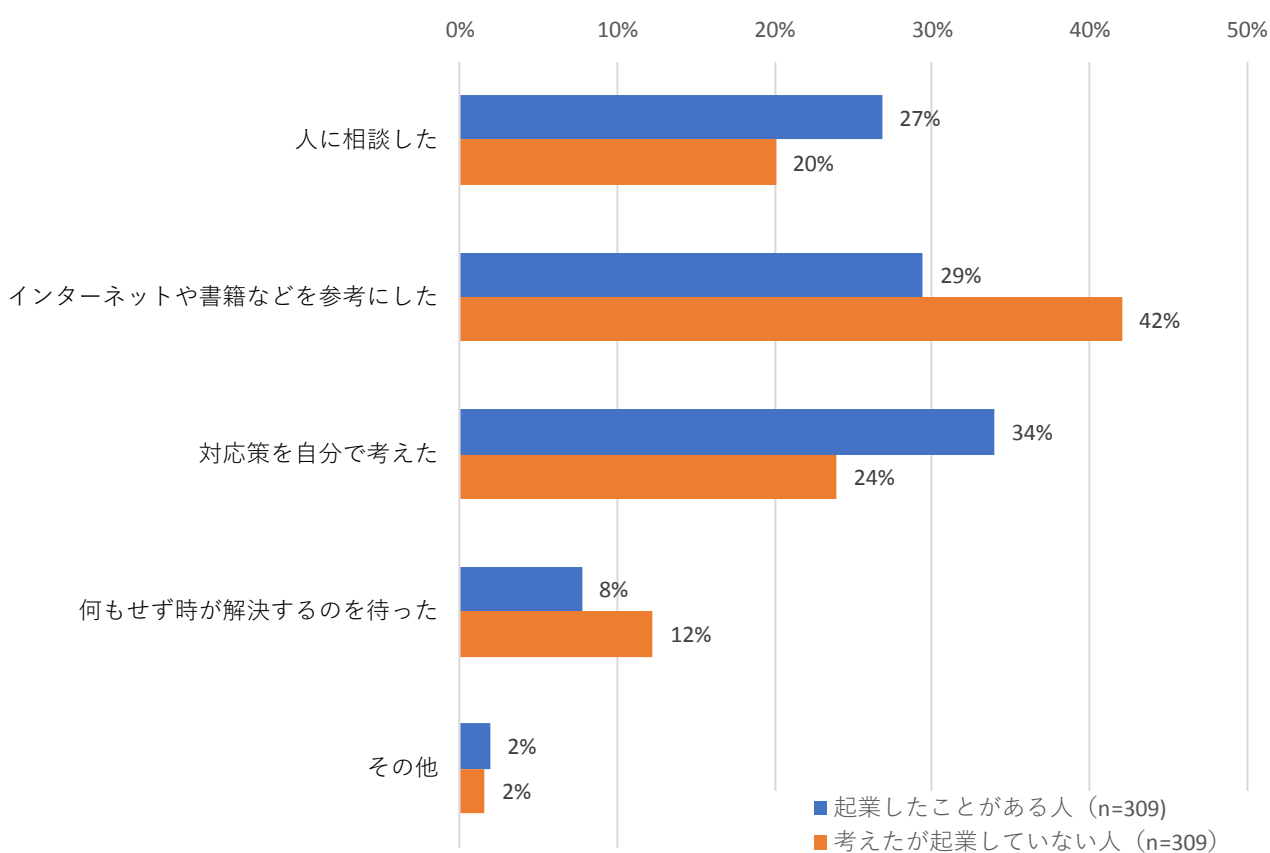
表 4 不安を解消するために、はじめに行ったことは(最も強く考えた当時の年齢別)

不安の解消方法	人に相談した	インターネットや書籍などを参考	対応策を自分で考えた	何もせず時間が解決するのを待った	その他
年齢					
30代未満 (n=189)	28%	40%	19%	10%	3%
30代 (n=178)	28%	30%	29%	12%	2%
40代 (n=140)	19%	40%	29%	11%	1%
50代 (n=83)	14%	33%	46%	5%	2%
60代以上 (n=28)	14%	32%	46%	7%	0%

不安を解消するために、はじめに行った行動は、全体として、「インターネットや書籍などを参考にした」と回答した割合が最も高い結果となった。また、男女別にみると、男性は「対応策を自分で考えた」割合が女性より高く、一方で女性は、「インターネットや書籍などを参考にした」割合が男性より高い。

選択肢の一つとして最も強く考えた当時の年齢別にみると、30代未満、30代、40代は、「インターネットや書籍などを参考にした」割合が高く、50代、60代は、「対応策を自分で考えた」割合が高い。また、世代間の傾向として、「人に相談した」と回答した割合は、30代未満、30代が高く、一方で、「対応策を自分で考えた」割合は、50代、60代の割合が高い。

図 19 不安を解消するために、はじめに行ったことは(起業した、していない別)

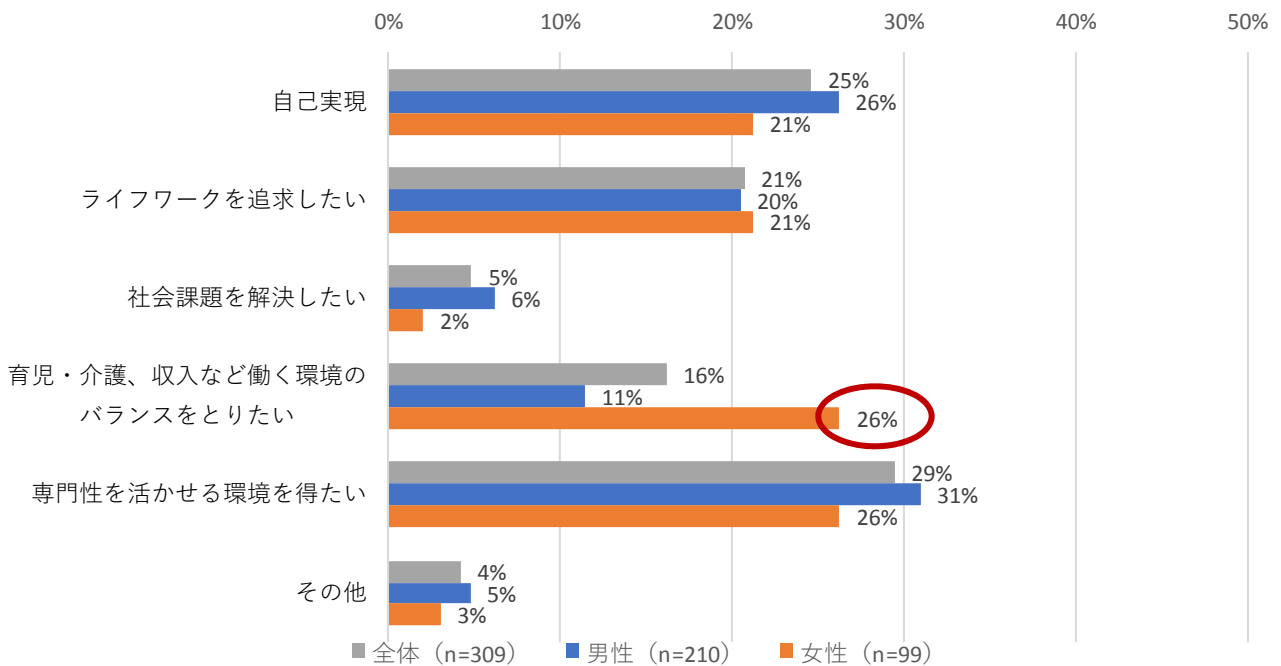


「起業したことがある人」、「考えたが起業していない人」を比較すると、「起業したことがある人」は、「人に相談した」、「対応策を自分で考えた」の割合が高く、一方で、「考えたが起業していない人」は、「インターネットや書籍などを参考にした」、「何もせず時間が解決するのを待った」の割合が高い傾向がみられる。

(4) 「起業したことがある人」と「考えたが起業していない人」に関する調査結果

① 「起業したことがある人」の根底にあった動機

図 20 起業・独立・開業をするに至ったそもそもの背景にあった動機(男女別)



(注) 各項目の具体例

- ・自己実現：(例) ビジネス界でのキャリアを発展させる。サラリーマンでは得られないような稼ぎを手にした。
- ・ライフワークを追求したい：(例) 利益偏重ではなく、自分のライフワークを追及したい。
- ・社会課題を解決したい：(例) 友人や同僚、コミュニティのメンバーなどの課題を解決したい。
- ・育児・介護、収入などの働く環境のバランスをとりたい：(例) 自宅で働きたい、会社勤めが嫌だった、働く時間を自分でコントロールしたい、自分の裁量で自由に働きたい、時間的・精神的なゆとりがほしい。
- ・専門性を活かせる環境を得たい：(例) 年齢に関係なく働きたい

表 5 起業・独立・開業をするに至ったそもそもの背景にあった動機(最も強く考えた当時の年齢別)

年齢 \ 動機	自己実現	ライフワークを追求したい	社会課題を解決したい	育児・介護、収入など働く環境のバランスをとりたい	専門性を活かせる環境を得たい	その他
30代未満 (n=90)	31%	24%	7%	18%	18%	2%
30代 (n=96)	26%	19%	4%	17%	29%	5%
40代 (n=61)	21%	23%	5%	16%	31%	3%
50代 (n=44)	18%	16%	5%	16%	39%	7%
60代以上 (n=18)	11%	17%	0%	6%	61%	6%

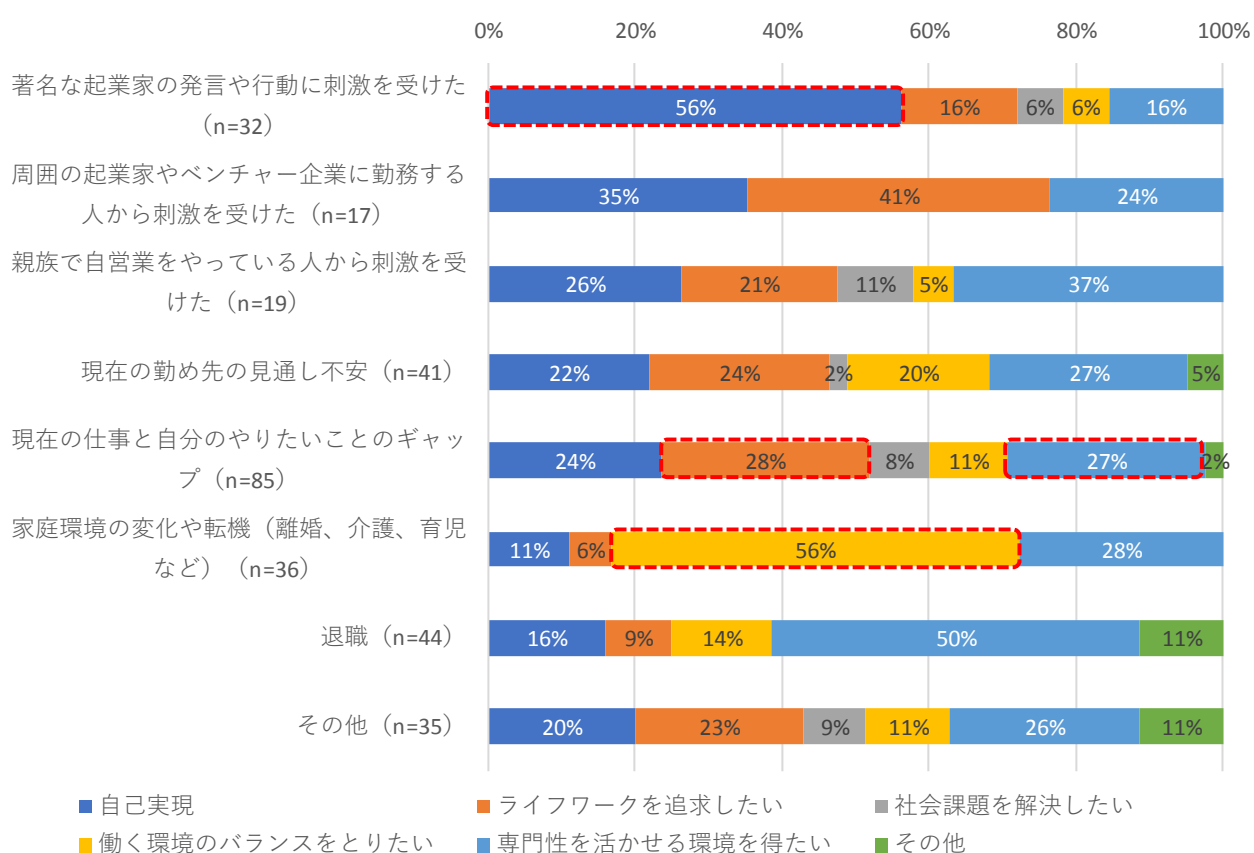
「起業したことがある人」の根底にあった動機について尋ねた結果、全体として、「専門性を活かせる環境を得たい」と回答した割合が最も高く、次いで「自己実現」と続く結果となった。また、男女別にみると、「育児・介護、収入など働く環境のバランスをとりたい」で、女性が男性を大きく上回っている。

選択肢の一つとして最も強く考えた当時の年齢別にみると、30代未満は「自己実現」の割合が高く、30代以上の世代は「専門性を活かせる環境を得たい」の割合が高い。

また、世代間の傾向として、「自己実現」と回答した割合は、30代未満、30代が高く、一方で、「専門性を活かせる環境を得たい」の割合は、世代の上昇とともに増加している。

② 起業が選択肢の一つとなったきっかけと根底にあった動機の関係

図 21 きっかけとそもそもの背景にある動機の分析



「起業が選択肢と認識された機会（きっかけ）」と「起業家自身の根底にある動機」の関係を分析した結果、きっかけの選択肢の中で回答数が最も多かった「現在の仕事と自分のやりたいことのギャップ」と回答した人は、根底にあった動機として、「ライフワークを追求したい」の割合が最も高く、次いで、「専門性を活かせる環境を得たい」と続く。

他にも、30代未満の回答数が多かった「著名な起業家の発言や行動に刺激をうけた」と回答した人は、「自己実現」が根底にあった動機として最も高く、女性の回答数の割合が男性を大きく上回った「家庭環境の変化や転機」と回答した人は、「働くバランスをとりたい」と回答した割合が高い。

③「起業・独立・開業を考えたが起業していない人」の状況

図 22 起業・独立・開業に対する状況(男女別)

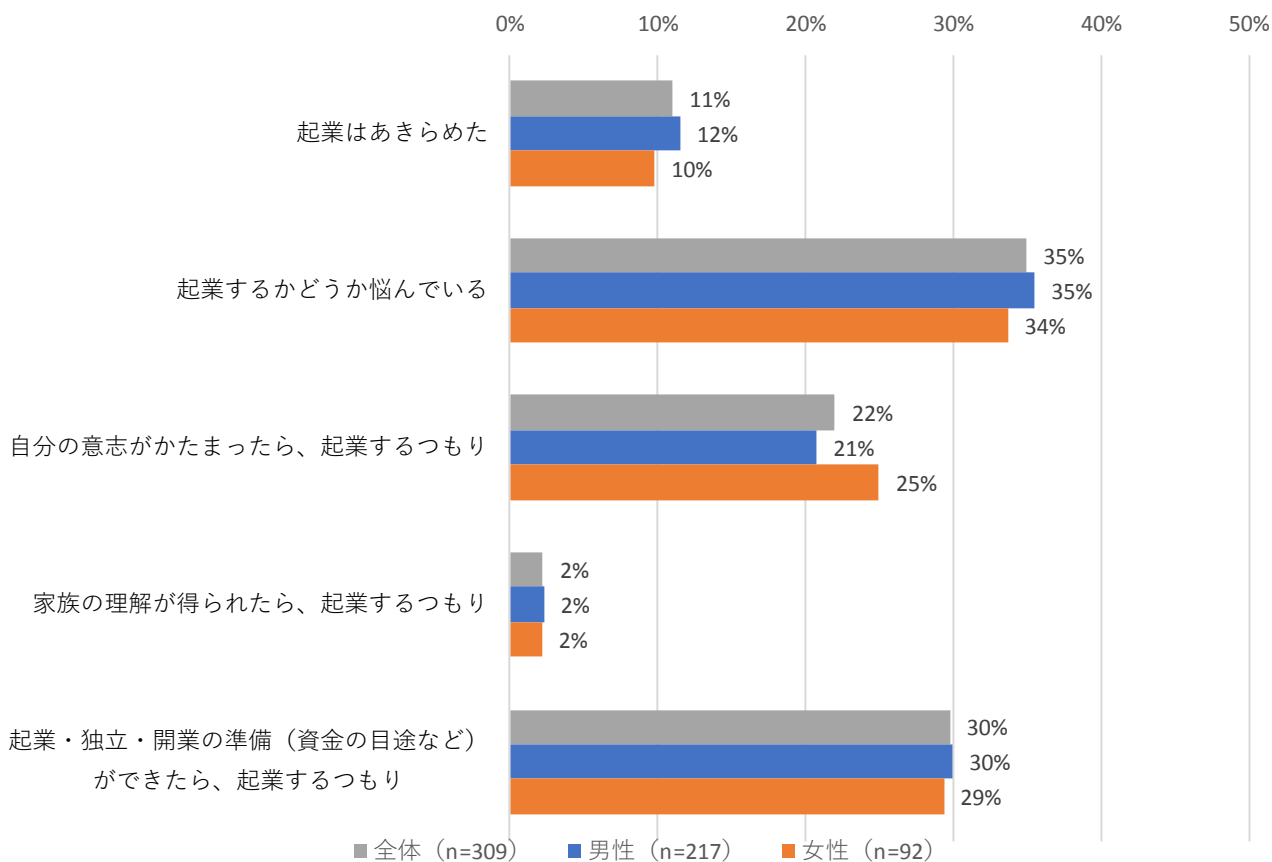


表 6 起業・独立・開業に対する状況(アンケート回答時の年齢別)

状況	起業はあきらめた	起業するかどうか悩んでいる	自分の意志がかたまったら、起業	家族の理解が得られたら、起業す	目途（資金の）ができたなら、起業するの
年齢					
30代未満 (n=54)	9%	30%	26%	0%	35%
30代 (n=71)	8%	42%	24%	4%	21%
40代 (n=96)	15%	36%	18%	3%	28%
50代 (n=67)	12%	34%	18%	1%	34%
60代以上 (n=21)	5%	19%	38%	0%	38%

本調査の対象とした「5年以内に起業を考えたが起業していない人」のアンケート回収時点の状況は、全体として、「起業するかどうかが悩んでいる」と回答した割合が最も高く、次いで「起業・独立・開業の準備ができたなら、起業するつもり」と続く結果となった。また、男女別にみると、「自分の意思がかたまったら、起業するつもり」で、わずかに女性が男性を上回っているが、大きな差はみられなかった。

アンケート回答時の年齢別にみると、30代未満は、「起業・独立・開業の準備ができたなら、起業する」と回答した割合が高い。30代、40代は、「起業するかどうかが悩んでいる」と回答した割合が高く、50代は他にも、「起業・独立・開業の準備ができたなら、起業するつもり」と回答した割合が高い。60代は、「自分の意思がかたまったら、起業するつもり」、「起業・独立・開業の準備ができたなら、起業するつもり」と回答した割合が高い。

また、特筆すべき点として「起業するかどうかが悩んでいる」と回答した割合は、他の世代と比べて30代が最も高い。

4. グループインタビュー・インタビュー調査

(1) グループインタビュー・インタビュー調査概要

調査は、アンケート調査で行った起業・独立・開業に関する「選択肢の一つとしたきっかけ」や「根底にある動機」等について、属性による違いや、アンケート調査では捕捉できなかった具体例を探るため、起業・独立・開業をした人を対象にグループインタビュー及びインタビュー調査を行った。また、民間企業と連携した起業支援の取組みで成果をあげる地方自治体と女性起業支援に取り組む支援事業者にもインタビュー調査を行った。

①回答者の属性

属性については、アンケート調査で明らかとなった、男女間や世代による違い、「きっかけ」と「動機」の関係性を参考に、「学生起業家」、「子育て中の女性起業家」、「専門性を活かした起業家」、「副業からの起業家」、「移住を伴う起業家」の5つのカテゴリーを対象にしている。

②調査対象

カテゴリー	グループインタビュー調査	インタビュー調査
	世代・人数	人数
学生起業家	20代、4名	-
子育て中の女性起業家・起業準備者	30代～50代 6名	1名
専門性を活かした起業家	30代～50代 4名	1名
副業からの起業家	-	3名
移住を伴う起業家	-	3名
地方自治体	-	西栗倉村役場
女性起業支援事業者	-	日本ママ起業家大学

③実施方法・実施期間・質問項目・取りまとめ方法

実施方法：対面による聞き取り調査

実施期間：2018年10月～2019年2月

主な質問項目：1. 起業が選択肢の一つになったきっかけ
2. 根底にある動機 他

取りまとめ方法：調査結果は、以下のステップで取りまとめを実施

ステップ1・・・カテゴリー内の共通点の抽出

ステップ2・・・カテゴリー毎の共通点の抽出及び相違点の分析

(2) グループインタビュー・インタビュー調査結果 (カテゴリー内の共通点の抽出)

カテゴリー：学生起業家

	内容
<p>起業が選択肢の一つになったきっかけ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大学1年生の時、「<u>金持ち父さん 貧乏父さん(ロバート・T. キヨサキ&シャロン・L. レクター,2000)</u>」を読んで起業に関心を持った。 ・高校生の時、書店で手に取った「<u>生き方(稲盛和夫,2004)</u>」を読み、<u>カッコいいと感じ、周囲を見返すには社長になることだと思った。</u> ・史上最年少で<u>上場した人をメディアで見聞きました。</u> ・<u>祖父が自営業をされており、小学校の頃から社長室に憧れていた。将来は社長になりたいと思っていた。</u> ・シリコンバレーに旅行した際、起業家を沢山見て、起業を選択肢と考えた。 ・就職活動をして内定もらった。サラリーマンになろうとしたが、福島県出身で震災を経験したこともあり、3年後の保障はなにもないと考え、起業することに決めた。 ・<u>父親が実業家で、幼い頃から起業を選択するものと考えていた。</u>
<p>根底にある動機</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中高大一貫校だったが、高校を中退。別の大学を受験したが失敗して浪人生となった。浪人中の1年間、誰にも会わないと決め、勉強に集中したところ、それが原因となり、<u>誰かに認めてもらいたい</u>と思っていた。 ・収入への欲求はほとんど考えていなかった。 ・高校生の時にボランティア団体を立ち上げ、評価を得ることができた。東京に進出してみたものの相手にされず、虚しさを覚え、<u>いつか結果を出したい</u>と思った。 ・企業へインターンシップをした際、窮屈に感じ、就職に向いていないと思った。 ・高校生の時、プロサッカー選手を目指していたが、強豪校にボロボロに敗れて挫折を経験した。サッカーでは結果を出せなかったが、<u>誰かに認めてもらいたい、目立ちたい、自由になりたい</u>と思った。 ・お金目当てではなかった。 ・小学生の頃、いじめにあい、<u>どうすれば周囲の人に認めてもらえるか考えて生きてきた。</u>

(注) 共通点毎に色分けを行っている

	内容
<p>起業が選択肢の一つになったきっかけ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・勤務先が倒産した。倒産後、取引先から自身へ仕事の依頼があり、個人だとビジネスが進めにくいと考え、起業しようと決意した。 ・初めて就職した当初、思い描いていたイメージと違い大きな挫折を感じた。何冊も本を読み、人を雇う側か、雇われる側かどちらかだと知り、自らが起業するしかないと思った。 ・出産時に大変な思いをしたが、産後にケアをしてくれるところがなく、自分で何かできないか考えるようになった。 ・<u>勤め先を探していたが、自宅近くの産婦人科には理学療法士としての働き先が見つからず</u>、起業するしかないと思った。 ・結婚を機に退職し、子育てが落ち着いたら働く予定だったが、<u>雇用条件や、勤務時間が合わなかった</u>。また、企業が提供するサービスと自身が提供したいサービスにギャップがあった。自分の使える時間で起業しようと考えた。 ・子供の健康状態に対応しなければならない時に、休めないなど、<u>雇われていると、時間に柔軟性がなく、選択肢が他になかった</u>。 ・50歳になり、後10年位しか働けないと思ったとき、起業をしたいと思った。 ・特にこれといった事情はないが起業という選択肢に興味があった。
<p>根底にある動機</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>育児、家事、仕事を自分でコントロールできる生き方がしたい</u>と思っていた。 ・自分が好きなことを仕事にしたいと思っていた。 ・働いている姿を子供に見せ続けたかった。 ・<u>子供を優先したい</u>と考えていたので、会社勤めは避けたいと考えていた。 ・夫が経営者で、自身は経理、事務、営業をやっているが、<u>自身が望む生き方をしたい</u>と思っていた。 ・20代は職を転々とし、30代になって結婚、出産を経験した。育児をする中で、「<u>〇〇君のママ</u>」という存在だけでなく、<u>自分らしく生きたい</u>という思いがあった。 ・仕事をして社会と繋がってきた経験があるので、<u>ママとして妻としての役割だけでは満たされない</u>思いがあった。

カテゴリー：専門性を活かした起業家

	内容
<p>起業が選択肢の一つになったきっかけ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・パートナーのいる地域に就職先を絞り、専門性を活かせる仕事を探していたが選択肢があまりなかった。専門性を活かしながら場所に縛られない働き方を模索する中で、起業が選択肢となった。 ・アルバイトをしていたが、時間を切り売りする働き方に限界があると感じており、自分の専門性を活かせていないと感じていた。 ・法律業界は起業・独立・開業が一般的な選択肢で、当面の資金が貯まり、開業の目処がたったので、起業が具体的な選択肢になった。 ・<u>勤めていた会社の待遇面の不満</u>から転職を考えた。過去2回転職していたことと、年齢的に転職しても希望する会社に就職できる可能性は低いと思った。 ・<u>勤めていた会社の先行きが危なくなってきたことと、待遇面が悪くなった</u>ことで、起業を考え始めた。 ・社内プロジェクトが中止となり、どうにか商品開発を実現したいという思いを捨てきれず、起業して実現させようと決意した。
<p>根底にある動機</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・家族と一緒にいる時間を一番大切にしたいと思っていた。 ・会社に勤めていると収入面で限界があり、独立してやってみようと思っていた。 ・朝9時に出勤して夕方6時に退社する日々は、自分にとって非効率だと感じていたので、<u>時間を自由に使えるワークスタイルを実現したかった</u>。 ・会社で自分の想定していたことと違う仕事をすることになり不満があった。<u>自由に働ける環境がほしかった</u>。 ・友人のパートナーから在宅勤務をしたい、副業・兼業をしたいというニーズがあることを知っており、支援したいと思っていた。優秀な人がいるのに雇用先がないという社会を変えたいと思っていた。 ・会社でできないことを自身で実現したいという思いがあった。

カテゴリー：副業からの起業家

	内容
<p>起業が選択肢の一つになったきっかけ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・サラリーマンの時、アメリカに5年間駐在していた。帰国命令が帰国の1か月前に出て、紙1枚で自分の生活が左右されてしまうことに違和感があった。帰国したら会社を辞めようという気持ちが強くなった。 ・在職中うつ病にかかり体重が増加。うつ病を克服するために心理学を勉強する過程で運動を取り入れた独自の手法を考案した。うつ病を克服できた実体験を事業化したいと思った。 ・30代半ばで年収600万円を稼ぐことができ、待遇面に不満はなかったが、仕事のやりがいを感じられないことが不満だった。 ・勤務先が近い将来倒産する危機感があった。
<p>根底にある動機</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・当時、金融関係の職に就いており、中小企業診断士の資格を所有していた。資格を活かして自分で働きたい、仕事と生活のバランスをとりたいと思っていた。 ・サラリーマンにはなったものの、いつかは独立したいと思っていた。 ・自身と同じようにうつ病で苦しんでいる人をサポートしたいと思うようになり、自身の経験と考え方を人に伝えたいという思いがあった。 ・プロのスポーツ選手として活躍していた経験があり、引退後のセカンドキャリアでは、社長になり年収1,000万円以上を稼ぐような金銭的な成功を得たいと考えていた。
<p><参考> 副業を選択した理由</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・結婚して家庭があり、当時は子供も幼かったため、すぐに独立することが難しかった。また、勤務先の先輩社員からアドバイスもあり、副業をはじめることにした。 ・会社に勤めていた頃から、サラリーマンと副業の両輪で働きたいと考えており、最初は少ない収入から始めようと考えた。 ・プロのスポーツ選手として係りのあった競技に携わる仕事がしたいと思うようになったが、仕事が忙しく日中に時間が確保できなかった。

カテゴリー：移住を伴う起業家

	内容
<p>起業が選択肢の一つになったきっかけ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事内容の不一致により退職し、田舎暮らしか世界旅行を考えていた。移住を促進している地域を探していたところ、<u>ある自治体が「地域おこし協力隊制度」の人員を募集していた。当時、移住先での起業も視野に入れて参加することにした。</u> ・都市部の企業で中間管理職として勤務していたが、家庭を優先するために移住した。移住先で職を探していたが、収入面で希望する職が見つからず、起業するしかないと考えるようになった。 ・学生の頃、就職活動も視野にあったが、起業にも関心があった。その最中、<u>友人の誘いを受けて地方のNPOのインターンシップに参加した。</u>インターンシップ先では、新規事業に挑戦し、試行錯誤の日々を過ごした。その経験から起業に興味を持つようになった。
<p>根底にある動機</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一人でもどこまでできるか試したいと思っていた。 ・移住先で家族と暮らしていくために、満足のいく収入を得たいと思っていた。 ・自営業を営む親族から安定した職種に就職するよう勧められていたが、自身は安定を望んでいなかった。また、悩んだ末、<u>「自身で仕事を生み出すことが安定となる」と思うようになった。</u>
<p><参考> 移住を伴う起業の二一ズ</p>	<p>・移住して起業したいと思う人は、夢が先行している場合があり、実際の経営で厳しい状況に陥ることがある。成功するためには、起業家自身の努力は必要だが、一方で、一定の距離感で支援の手を差し伸べてもらえるような環境があるとよい。自治体側の支援として、住宅を提供するサービスを行っている地域もあるが、住まいだけでなく、自治体側から移住者のコミュニティに参加してもらいたい。</p>

(3) グループインタビュー・インタビュー調査結果(カテゴリー毎の共通点の抽出及び相違点の把握)

本調査で行った5つのカテゴリーに対するグループインタビュー・インタビュー調査結果をカテゴリー毎に並べてみたところ以下のような結果となった。

	学生起業家	子育て中の女性起業家・起業準備者
起業が選択肢の一つになったきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・「金持ち父さん 貧乏父さん(ロバート・T. キヨサキ & シャロン・L. レクター,2000)」を読んで起業に関心を持った。 ・「生き方(稲盛和夫,2004)」を読み、カッコいいと感じ、周囲を見返すには社長になることだと思った。 ・上場した人をメディアで見聞きした <p style="text-align: center;">著名な起業家に刺激を受けた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・祖父が自営業をしており、小学校の頃から社長室に憧れていた。将来は社長になりたいと思っていた。 ・父親が実業家で、幼い頃から起業を選択するものと考えていた。 <p style="text-align: center;">起業家への憧れ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・勤め先を探していたが、自宅近くの産婦人科には理学療法士としての働き先が見つからなかった。 ・雇用条件や、勤務時間が合わなかった。 ・雇われていると、時間に柔軟性がなく、選択肢が他になかった。 <p style="text-align: center;">労働条件の相違</p>
根底にある動機	<ul style="list-style-type: none"> ・誰かに認めてもらいたい。 ・いつか結果を出したい。 ・誰かに認めてもらいたい、目立ちたい、自由になりたい。 ・どうすれば周囲の人に認めてもらえるか考えて生きてきた。 <p style="text-align: center;">承認欲求</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・育児、家事、仕事を自分でコントロールできる生き方がしたい。 ・子供を優先したい。 <p style="text-align: center;">働く環境のバランスをとりたい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自身が望む生き方をしたい。 ・「〇〇君のママ」という存在だけでなく、自分らしく生きたい。 ・ママとして妻としての役割だけでは満たされない。 <p style="text-align: center;">自分らしく生きたい</p>

参考：動機

- ・自己実現：(例) ビジネス界でのキャリアを発展させる。サラリーマンでは得られないような稼ぎを手にしたい。
- ・ライフワークを追求したい：(例) 利益偏重ではなく、自分のライフワークを追及したい。
- ・社会課題を解決したい：(例) 友人や同僚、コミュニティのメンバーなどの課題を解決したい。
- ・育児・介護、収入などの働く環境のバランスをとりたい：(例) 自宅で働きたい、会社勤めが嫌だった、働く時間を自分でコントロールしたい、自分の裁量で自由に働きたい、時間的・精神的なゆとりがほしい。
- ・専門性を活かせる環境を得たい：(例) 年齢に関係なく働きたい

専門性を活かした起業家	副業からの起業家	移住を伴う起業家
<p>・勤めていた会社の待遇面の不満。</p> <p>・勤めていた会社の先行きが危なくなってきたことと、待遇面が悪くなった。</p> <p style="text-align: center;">勤め先への不満</p>	<p>・紙 1 枚で自分の生活が左右されてしまうことに違和感があった。帰国したら会社を辞めようという気持ちが強くなった。</p> <p>・やりがいを感じられないことが不満だった。</p> <p style="text-align: center;">勤め先への不満</p>	<p>・ある自治体が「地域おこし協力隊制度」の人員を募集していた。当時、移住先での起業も視野に入れて参加することにした。</p> <p>・友人の誘いを受けて地方のNPOのインターンシップに参加した。</p> <p style="text-align: center;">地域おこし協力隊やインターンシップの参加</p>
<p>・時間を自由に使えるワークスタイルを実現したかった。</p> <p>・自由に働ける環境がほしかった。</p> <p style="text-align: center;">働く環境のバランスをとりたい</p>	<p>・いつかは独立したい。</p> <p>・社長になり年収 1,000 万円以上を稼ぐような金銭的な成功を得たい。</p> <p style="text-align: center;">自己実現</p>	<p>・一人でどこまでできるか試したいと思っていた。</p> <p>・「自身で仕事を生み出すことが安定となる」と思うようになった。</p> <p style="text-align: center;">自己実現</p>

調査の結果、カテゴリー内及びカテゴリー毎にみると共通点や相違点がみられた。

<学生起業家>

「著名な起業家に関する著書からの刺激」や「起業家への憧れ」によって、起業が選択肢の一つとなる共通点が見られた。また、今回調査を実施した4名中3名は過去の挫折経験をもとに、「誰かに認めてもらいたい」といった承認欲求が起業への動機となっている。

<育児中の女性起業家・女性起業準備者>

調査を実施した5名中4名は過去に在職経験があった。結婚、出産、育児といったライフスタイルの変化によって退職し、子育てが落ち着いた段階で雇用先を探すものの、「労働条件の相違」が起業を選択肢として認識するきっかけとなっている。また、動機については、「育児と働き方のバランスをとりたい」、「自分らしく生きたい」といった共通点が見られる。

<専門性を活かした起業家>

起業が選択肢の一つとなったきっかけとして、「勤務先への不満」が共通している。また、起業の背景にある動機については、「働く環境のバランスをとりたい」となっている。

<副業からの起業>

「勤め先への不満」によって、起業が選択肢の一つとなる共通点が見られた。また、副業を選択した理由について、いきなり起業するリスクの回避や時間的な制約が要因となっている。また、動機については、「自己実現」が共通していた。

<移住を伴う起業>

回答者のうち2名は出身地以外の地域に移住する1ターンで、1名はパートナーの出身地へ移住するUターンである。1ターンで起業をした人は、「地域おこし協力隊やインターンシップの参加」がきっかけとなっている。また、動機については、「自己実現」が共通していた。

5. 起業の裾野拡大のために必要な機会や取組み

これまで、起業家自身の「起業が選択肢と認知された機会（きっかけ）」及び「根底にある動機」について、実態を把握し、共通点を明らかにしてきた。しかし、本調査のもう一方の目的である創業支援策の立案や創業支援事業の運営に資するためには、起業を選択肢として認識してもらうために必要な機会や取組みといったニーズへの理解が重要である。

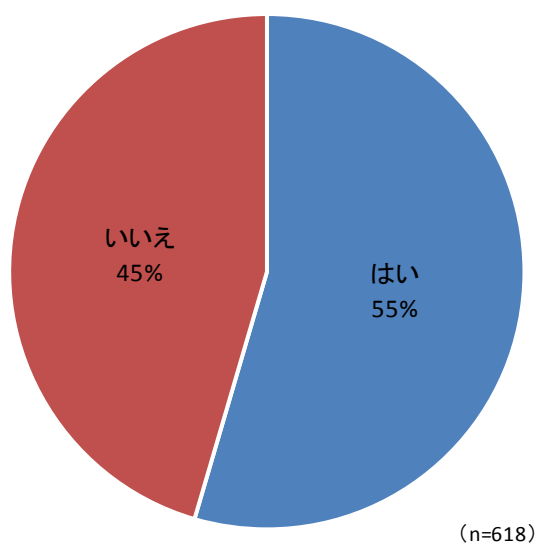
そこで、アンケート調査及びグループインタビュー・インタビュー調査で得られた結果をもとに、「起業が選択肢の一つとして認識してもらうために必要な機会や取組み」について述べていく。

(1) 起業が選択肢の一つとして認識してもらうために必要な機会や取組み（アンケート調査結果）

① 起業が選択肢の一つとして認識されるのはいつか

まず、アンケート調査を振り返ると、起業・独立・開業を選択肢の一つとして考えたことがある人を世代別にみると、30代未満は、他の世代と比べて「考えたことがない」と回答した割合が最も高く、起業への関心は低い【3. アンケート調査（2）参照】。ところが、起業を考えたことがある人を対象に行ったアンケート調査によると、起業を選択肢として認識した時期については、55%がはじめての就職時もしくはそれ以前のタイミングで起業が選択肢としてイメージされていることがわかった【図 23】。以上のことから、起業が選択肢の一つとして認識してもらうために必要な機会や取組みについて、「はじめての就職時」と「キャリアや人生の転機」の2つの段階に分けた。

図 23 はじめての就職時、もしくはそれ以前のタイミングで、起業・独立・開業が身近な選択肢としてイメージされたか



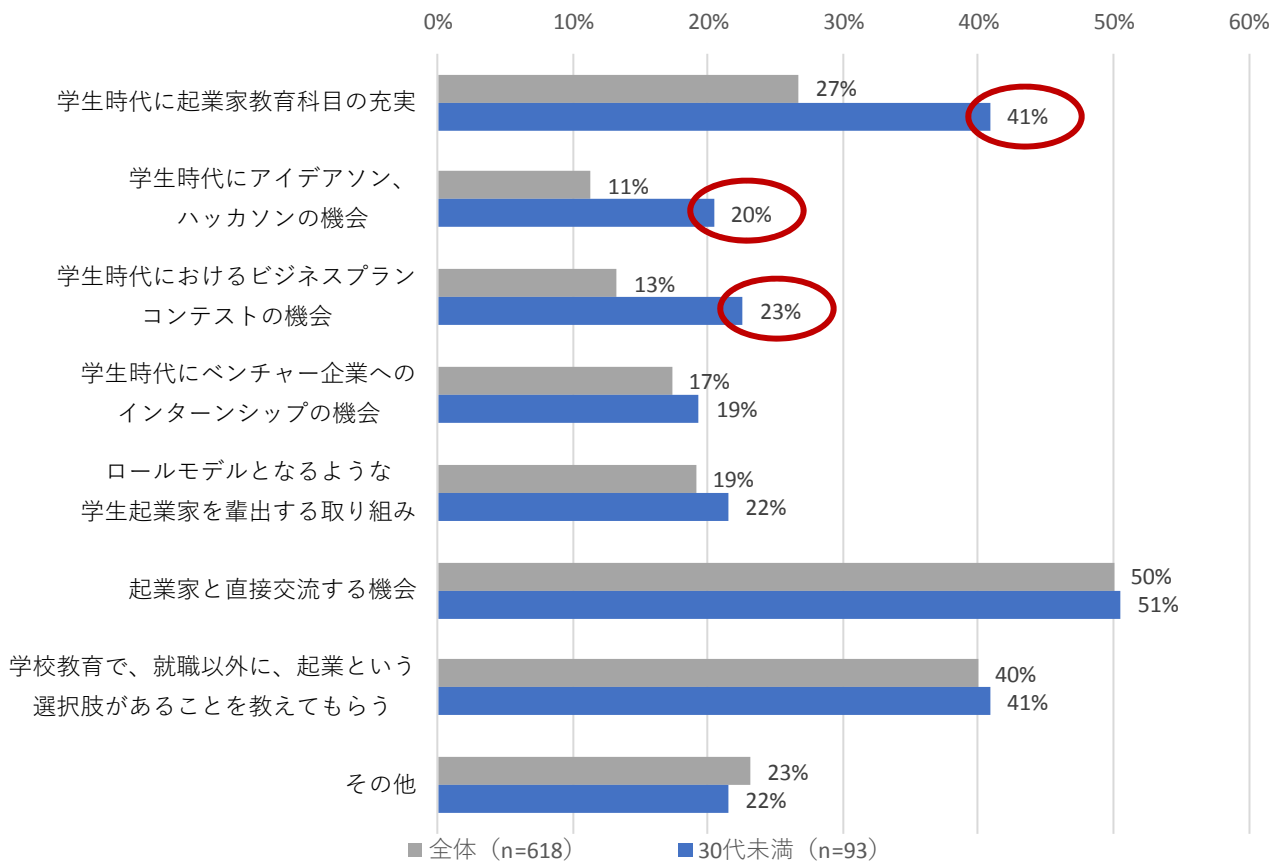
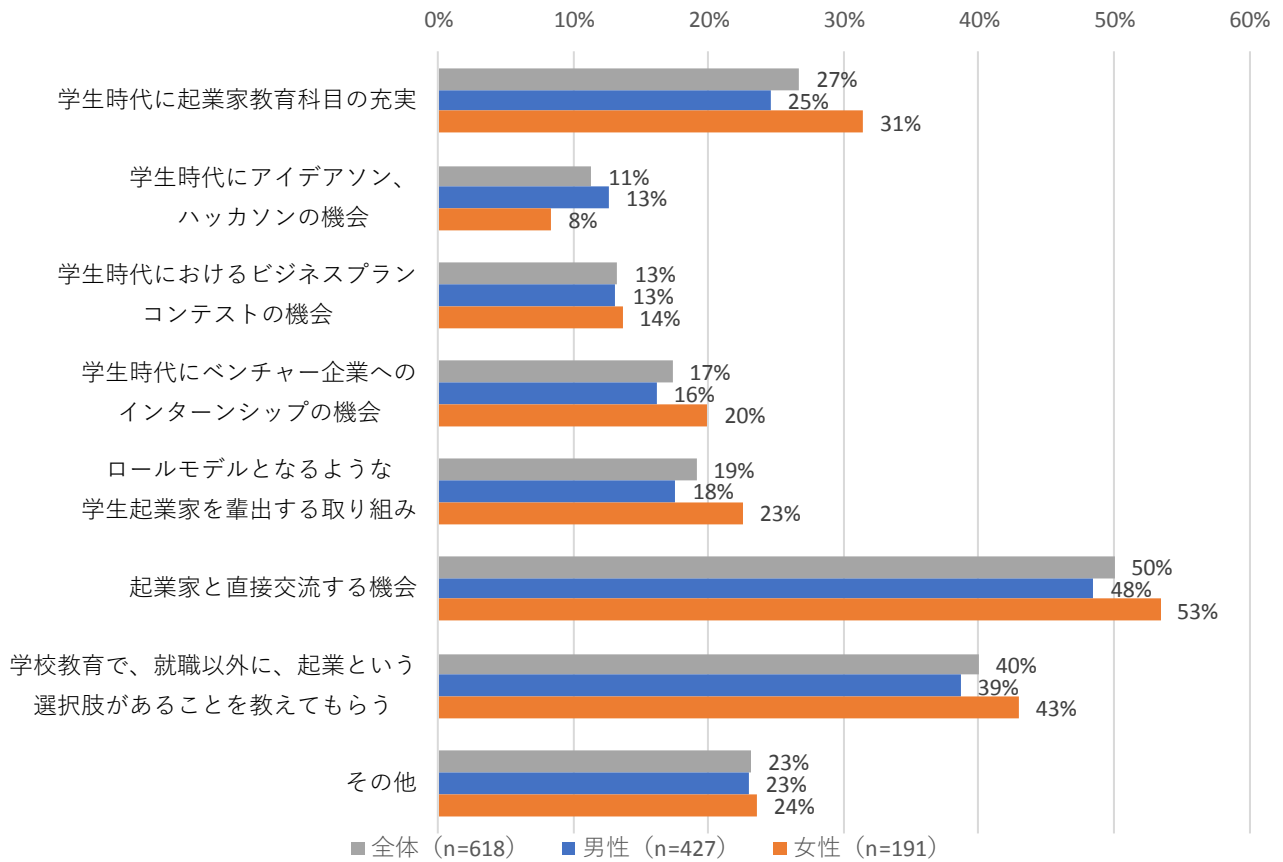
(注) 本調査で実施したアンケート調査による

② はじめての就職時に起業を選択肢の一つとして認識してもらうためには

はじめての就職時に起業が選択肢になるために必要な機会や取組みについては、全体、男女ともに「起業家と直接交流する機会」と回答した割合が最も高い。また、30代未満でみると、「学生時代に起業家教育科目の充実」や「学生時代におけるビジネスプランコンテストの機会」といったように学生時代に対する機会や取組みを求める割合が全体と比べて高い結果となった。

図 24 はじめの職業選択時に、起業・独立・開業が選択肢の一つになるためにどのような機会や取組みが必要か

(複数回答)



③キャリアや人生の転機に起業を選択肢の一つとして認識してもらうためには

次に、キャリアや人生の転機に起業が選択肢の一つになるために必要な機会や取組みについての結果をみると、全体として「副業、兼業の支援」と回答した割合が最も高い。また、男女別にみると「起業準備中の育児や介護の支援」で、女性が男性を大きく上回っている。

さらに、アンケート回答時の年齢別にみると、30代未満から50代にかけて、「副業、兼業の支援」と回答した割合が高く、60代以上は、「起業家コミュニティの形成、情報交換の場を身近にする」の割合が高い。一方で、世代間の傾向として、「起業に失敗したときの再就職の支援」で他の世代と比べて30代未満が最も高く、世代が高くなるとともに減少している。同様に「メンターのような相談者による支援」でも30代未満、30代が高く、世代が高くなるとともに減少している。

図 25 キャリアの転機や人生の転機に、起業が選択肢の一つになるためにどのような機会や取組みが必要か
(複数回答)

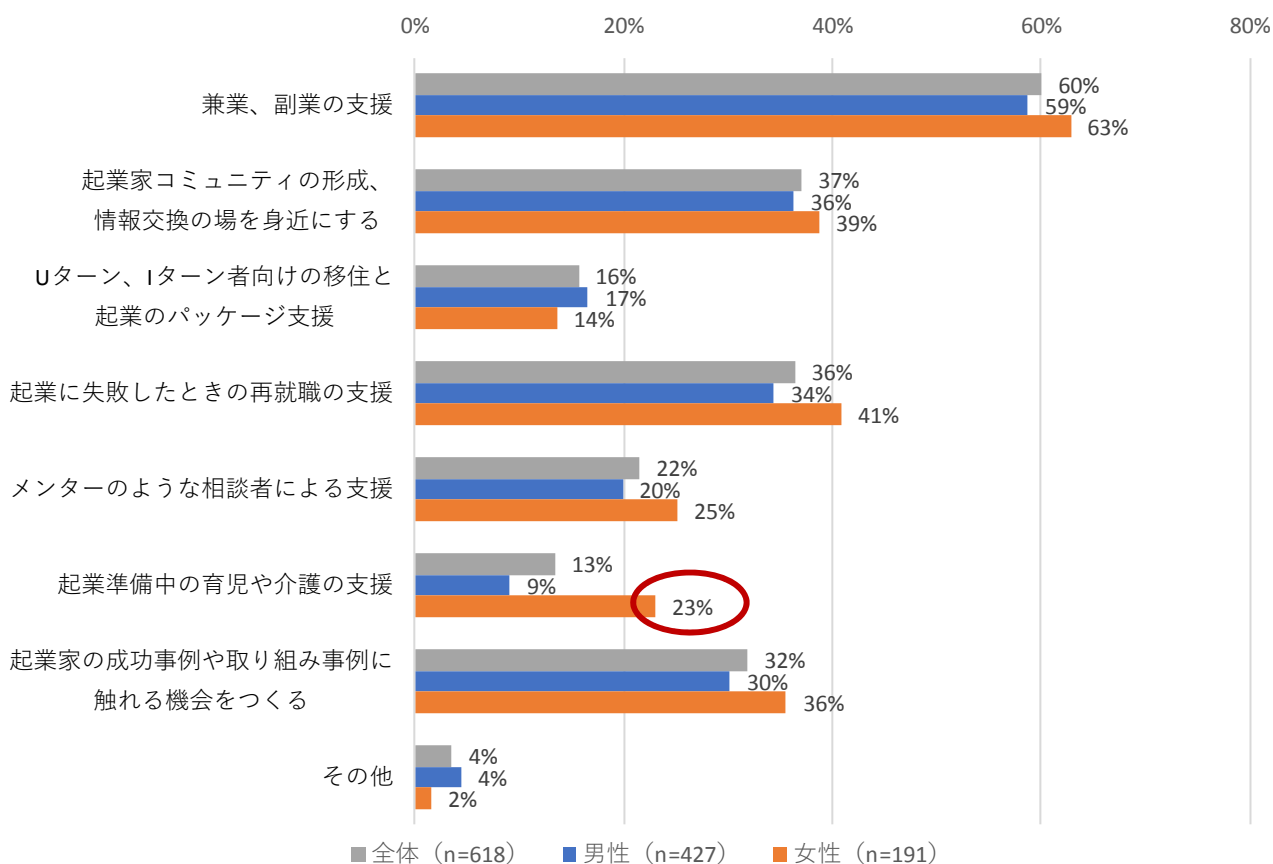


表7 キャリアの転機や人生の転機に、起業が選択肢の一つになるためにどのような機会や取り組みが必要か

(複数回答)

機会や取り組み 年齢	兼業、副業の支援	起業家のコミュニティの形成、情報交換	起業のパッケージ支援	Uターンの事業者向けの移住と	起業に失敗したときの再就職の支援	メンターのような相談者による支援	起業準備中の育児や介護の支援	起業家の成功事例や取り組み事例に	その他
30代未満 (n=93)	72%	33%	19%	43%	24%	16%	32%	2%	
30代 (n=165)	65%	42%	17%	38%	25%	21%	30%	4%	
40代 (n=173)	62%	35%	19%	36%	23%	12%	32%	3%	
50代 (n=131)	53%	31%	11%	34%	17%	9%	31%	2%	
60代以上 (n=56)	34%	46%	7%	29%	13%	4%	41%	9%	

(2) 起業が選択肢の一つとして認識してもらうために必要な機会や取組み（グループインタビュー・インタビュー調査結果）

「起業が選択肢の一つとして認識してもらうために必要な機会や取組み」に関するグループインタビュー・インタビュー調査を行った結果について共通点を抽出した結果、以下のとおりとなった。

	学生起業家	子育て中の女性起業家・起業準備者
必要な機会や取組み	<ul style="list-style-type: none"> ベンチャー企業へのインターンシップを半年間経験したことでビジネスのやり方を学ぶことができ、とても役に立った。 企業へインターンシップをした際、窮屈に感じ、就職に向いていないと思った。 自身の経験として、インターンシップは選択肢の一つになる方法だと思う。 <p style="text-align: center;">インターンシップの機会</p> <ul style="list-style-type: none"> 大学内に起業家育成プログラムがあり、そこで出会った仲間とビジネスを大きくすることができた経験から、起業に興味がある人が集まる場の存在はありがたかった。 「人」と「場所」が必要。仲間がいることは非常に重要である。 起業したいと考える人が集まり、出会う場を活用しているが、非常にありがたいと感じている。 年齢が近い、同じ思いを持つ人が集まる場があることがありがたい。 <p style="text-align: center;">起業を志す仲間が集う場</p>	<ul style="list-style-type: none"> 学校でもお金の仕組みや起業について学ぶ機会があればいい。雇われることが前提の働き方だけでなく、他に選択肢があることを子供のうちから教えてあげられる機会があるといい。 すごい成功者ではなく、先輩起業家にちょつとしたことを相談できる機会や起業ストーリーを聞ける機会として、座談会とかがあればよい。 起業だけでなく、人生の中で起業をどう捉えるのかということから話を聞ける講座があるといい。 <p style="text-align: center;">起業について学ぶ機会</p>

専門性を活かした起業家	副業からの起業家	移住を伴う起業家
<p>・独立するとどれくらいの収入が得られるのか、開業資金や経費がどれくらい必要なのか、生の情報がほしかった。</p> <p>・通訳関係の仕事をする上で価格の相場観が分からなかった。</p> <p>・情報面の支援があるとありがたい。</p> <p>・初期費用や毎月の運営費、税理士や社労士は誰に相談すればいいのか、相談費用はどれくらいかかるのか、分からなかった。</p> <p>金銭に係る情報を得る機会</p>	<p>・自分で稼いで生き生きとしている人を目にする機会があると、起業をイメージできるようになる。資格の勉強のためにシェアオフィスを使う人がいるが、そういう場で起業家を目にする機会もある。</p> <p>・起業家が安く利用できるレンタルオフィスを公的機関が用意して、起業を考える人が気軽に出入りできるようにすればよい。</p> <p>起業家と接点を持つ機会</p> <p>・自分のスキルでもお金を稼げることに気づくことができる場があるとよい。</p> <p>・起業そのものを啓発するよりも、そもそも今の働き方が今後も持続可能なのか？ということを考えさせる機会が必要だと思う。</p> <p>キャリアパスを考える機会</p>	<p>・自身の経験として、協力隊の活動期間が終了した際、トラブルに遭遇した。その際、自治体の担当者がサポートに入ってもらえて、大変ありがたかった。</p> <p>・自治体によっては、移住者を交えた交流会を実施し、起業を含めた移住促進施策を立案するため情報収集を行っている。</p> <p>・具体的な悩みがない人に対して、一緒に悩み、気軽に相談できる人がいると良い。移住を決めた地域の自治体の担当者の方は、他人事ではなく、一緒に考えてくれた。また、相談した際にも翌日には対応いただいた。レスポンスの早さは特に重要である。</p> <p>自治体のサポート</p>

<学生起業家>

調査を実施した4名中3名は過去にインターンシップの経験があった。インターンシップでビジネスを経験したことで起業に繋がるケースや、就職ではなく起業を選択する機会になっている。学生起業家の特徴としては、「起業を志す仲間や仲間が集う場」を重視している。

<子育て中の女性起業家・起業準備者>

子育て中の回答者からは、「起業について学ぶ機会」といった共通点がみられた。また、インタビュー調査の中で、子育て中の女性起業家・起業準備者からは、家庭と仕事の両立に不安を感じている人や、自身の身の丈にあった起業について悩んでいることがわかった。一方で、こうした育児中の女性が抱える問題に対して、支援やサービスが広がってきている。

<コラム>”自らの意志で笑顔で仕事をするよきママ起業家をたくさん輩出することが、幸せなニッポンの未来を作ることに繋がる”というビジョンのもと、育児中に起業を目指す人の裾野を拡大

日本ママ起業家大学（通称「ママ大」）は、子育てをしながら起業家を目指す女性を支援するため、起業を考えている人や既に事業を始めているがつまづいている人等を対象に、起業のための実践的なノウハウを学ぶためのスクールを開講している。

ママ大を立ち上げた近藤洋子代表は、以前はメディア業界で男性と肩を並べて働いていたが、子供が生まれて働き方に対する価値観が大きく変わったという。ビジネスを行う上で、「どれだけ会社が大きくなるか、売り上げが拡大するか」や「とにかく稼ぎたい」という価値観ではなく、「仕事も大事だが、子育ても家事も大事にしたい」、「自分らしく働きたい」という想いを大切にしたいと考え、子育てをしながら自分らしい働き方を実現するママ大を立ち上げた。

ママ大では個々の「自分らしさ」に合わせて、仕事の時間やビジネスのサイズを柔軟に変えることを提案している。仕事の時間に合わせるのではなく、子育てと家事の時間を確保した上で、一日の仕事に使える時間を割り出し、その時間に応じて客単価や月収目標を話し合いながら決めてゆく。子育てや育児との両立を重視することで、持続的な働き方を実現している。また、スクールはノウハウの習得だけでなく、同じような境遇の仲間と出会い、共通の悩みを解消し合えるような人脈作りの機会にもなっている。育児中は孤独になりがちのため、相談できる人、助け合える仲間が周りにはいる環境は何よりの支えになっている。

<専門性を活かした起業家>

業界として独立することが一般的であるケースがあり、開業資金や運転資金かかる費用など「金銭に係る情報を得る機会」を求める共通点がみられた。しかし、その要因として、金銭面に対する不安が大きいことが挙げられる。

<副業からの起業>

「起業家と接点を持つ機会」があれば、起業を意識する機会になるという共通点がみられた。他にも、「起業そのものを啓発するよりも、今の働き方が今後も持続可能なのかを考える機会が必要である」といったように、「キャリアパスを考える機会」が必要といった共通点がみられた。

<移住を伴う起業>

「自治体のサポート」を重視する点が共通している。特にIターンによる起業家は、移住する先での生活基盤を確立させる必要があることから、身近な相談相手としての自治体の役割は大きく、「具体的な悩みでない段階でも気軽に相談できる」、「地域住民とトラブルになった時には間に入ってもらえた」といったように、起業以外にも日常的な相談相手として、自治体の役割を重視していることがわかった。

<コラム>人口約1,600人の小さな村がIターンによる起業を実現させる仕組み

岡山県西粟倉村は人口が約1,500人で、村内の面積の93%が森林を占める。村は2004年に合併しないことを選択してから、地域の生き残りをかけた戦略として、村の豊富な資源である森林を生かした「百年の森林づくり」や「再生可能エネルギー事業」に取り組む一方で、Iターンによる起業家支援にも取り組んでおり、着実に成果をあげている。

限られた職員数で成果をあげられる理由には、地元の民間企業と二人三脚で取り組んでいる点に特徴がある。村役場は民間企業と連携し、ローカルベンチャー育成事業に取り組んでおり、移住と起業を促進するためのスクールプログラム「ローカルベンチャースクール」や、村の課題や可能性を切り口に事業プランを立てる「ローカルライフラボ」など、地域で起業家を産み出す支援を行っている。近年は、村役場と民間企業の枠を超えて、都市部にいる若者の起業支援に取り組むNPO法人ETIC（エティック）や西粟倉村を含む全国10自治体等と連携し、新たな人材の獲得や育成の仕組み作りに取り組んでいる。

村役場は民間企業と連携することで、限られた人員でも複数のプロジェクトを進めることが可能になり、さらに複数のプロジェクトの中で起業家と接点を持つ機会が増え、自治体の役割として重要な移住者が生活する上で生じる様々な相談に早く対応することが可能になっている。その結果、移住を考える起業家にとって安心できる環境となっている。

実際にIターンによって西粟倉村で起業した人によると、「西粟倉村役場は、起業家の相談に対して自分のことのように、一緒に悩み対応してもらえる。起業の準備に時間がかかると、支出が増えるので、相談に対する対応や回答の早さが、ここで起業する決めてになった」と話す。

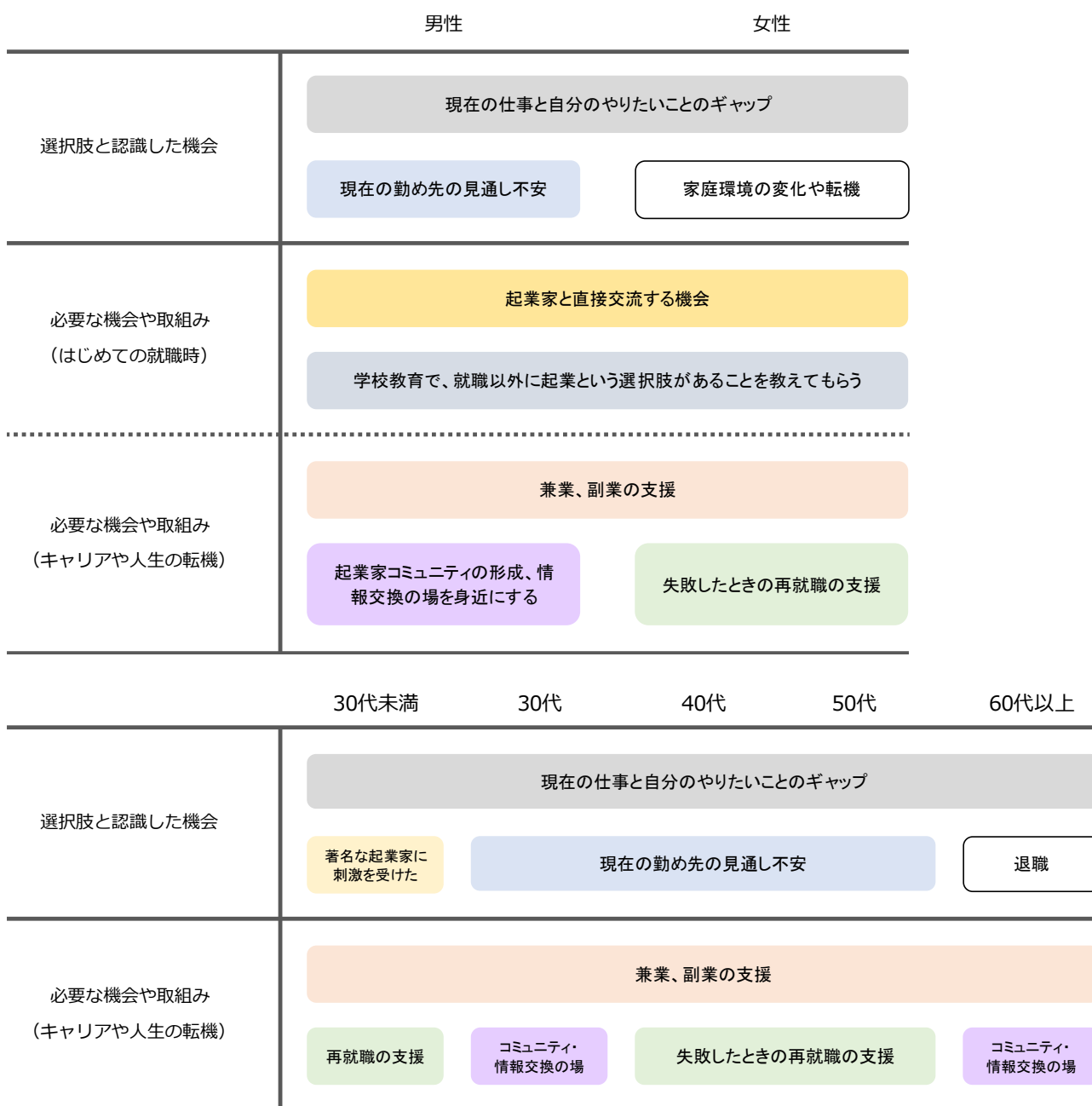
こうした取組みが口コミで広がり、西粟倉村で起業したいといった移住希望者もあらわれている。

(3) 起業の裾野を拡大するためには

本調査では、起業の裾野を拡大するためには、起業を選択肢として認識してもらうことが重要であると考え、認識する機会となる要因等について実態を把握するため調査を行った。また、調査結果をもとに性別、世代別、カテゴリー別に分析、比較し、一定の共通点や相違点の抽出を行った。

本調査のまとめとして、性別、世代別、カテゴリー別に並べたときに浮かび上がる共通点を以下に示す。創業支援策の立案や創業支援事業の運営において、全てのニーズに応えることは困難である。そのため、一定のユーザーを対象にした施策やサービスの提供を行う一助として、本調査で得られた視点を役立てていただけることを期待したい。

図 26 起業を選択肢と認識した機会及び選択肢として認識してもらうために必要な機会や取組み(性別、世代別)



(注) アンケート調査で各設問に対する回答割合が1位、2位となったもの。

図 27 起業を選択肢と認識した機会及び選択肢として認識してもらうために必要な機会や取組み(カテゴリー別)

	選択肢と認識した機会	必要な機会や取組み
学生起業家	著名な起業家に刺激を受けた	インターンシップの機会 起業を志す仲間が集う場
子育て中の女性起業家 ・起業準備者	労働条件の相違	起業について学ぶ機会
専門性を活かした 起業家	勤め先への不満	金銭に係る情報を得る機会
副業からの起業家		起業家と接点を持つ機会 キャリアパスを考える機会
移住を伴う起業家	地域おこし協力隊やインターンシ ップの参加	自治体のサポート

独立行政法人
中小企業基盤整備機構
企画部 調査課

〒105 - 8453 東京都港区虎ノ門3 - 5 - 1 (虎ノ門37 森ビル)

電話 03 - 5470 - 1521 (直通)

URL <https://www.smrj.go.jp/>

本書の全体または一部を、無断で複写・複製することはできません。

転載等をされる場合は、上記までお問い合わせ下さい。

この報告書の著作権は、独立行政法人中小企業基盤整備機構に属します。